

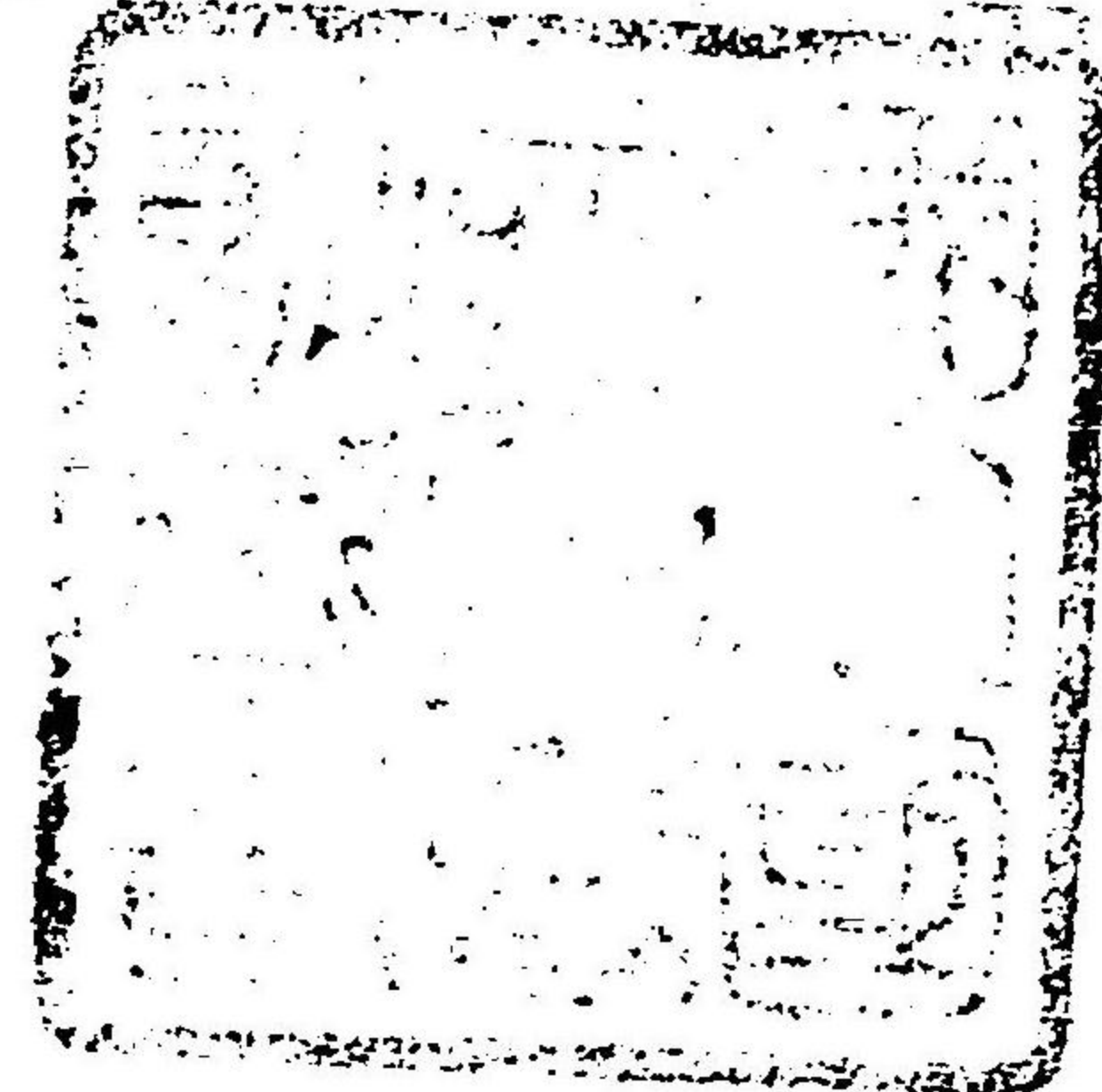
II-J-48

尾崎行雄著

支那處分案全

東京 博文館藏版

319.22
O 982A



30205

支那處分案自序

此一論は、直ちに胸臆を披て、獨自の私見を述ふるに
過ぎず。故に其責任、唯だ余か一身に在り。
事の軍機外交の秘密に屬すへきものは、總て之を言
議せず。讀者定めて隔靴搔痒の感あらん。
然れども軍機外交を擧て、悉く處士の言議外に置か
んと欲するは、專制時代の陋弊なり。故に其議して害
なく、却て益ある者は、俗情に拘泥せずして、縦横之を
言議せり。
世間幸に教を垂れんと欲する者あらば、願はくは先
つ全篇を通讀せられよ。若し一章一節に就て、賛駁の
辨を挿まは、恐くは盲夫評鼎の過ちよ落ちん。

(一)

茲に議せんと欲する所の問題は、至大至宏、其關係する所皆に東洋全局の安危に止らず、實に宇内列國の利害を増減す。是れ淺陋余か如き者の、妄に容喙すべき所に非ず。然れども此問題や邦人主として之を論定解釋せざる可らず、決して他人に放委すへきに非ず。而して世間之を試むるもの甚た少なし。是れ余か自ら量らず、大方識者の爲めに、敢て掃道の任を辭せざる所以なり。

甲午冬

學堂居士謹識

支那處分案目次

(一)

第一章 東亞の長計	六
第一節 地理的觀念	八
第二節 人種的觀念	九
第三節 永遠の治安及び福利	一二
第二章 支那の運命	一五
第一節 支那人の國家思想	一六
第二節 支那人の政治思想	二〇
第三節 支那人の戰鬥力	二六
第四節 支那人の道德	三二
第五節 歷朝の命數	三六
第六節 斷案	四三

第三章 列國の對清政畧……………四五

第一節 英の威迫政畧……………四六

第二節 英の懷柔政畧……………五一

第三節 英國政界の變狀……………五五

第四節 佛露曼米の情形……………六三

第五節 列國利害の衝突……………六八

第四章 帝國の對清政畧……………七二

第一節 日支同盟……………七六

第二節 共同扶翼……………八四

第三節 獨力扶翼……………八七

第四節 共同分割……………九〇

第五節 獨力併領……………九二

第六節 賣恩待賂……………九六

第七節 選擇……………九七

第五章 北京城下の盟約……………一〇〇

第一節 北京占領の必要……………一〇一

第二節 降字の誤解……………一〇五

第三節 媾和條件……………一〇八

第四節 斷案……………一一二

第六章 併領の難易……………一一三

第一節 支那及び支那人の特質……………一一五

第二節 古來の征服者……………一二九

第三節 印度征服の事例……………一二三

第四節 征服の經費及び兵力……………一二七

第五節 付言……………一三四

第七章 列國の交渉……………一三七

第一節 調停の二性質……………一四〇

第二節 干涉の二種類……………一四二

第三節 列國の形勢及び帝國の決心……………一四七

第八章

併領の利害

一五四

第一節 領域の縮小……………一五六

第二節 屬領政略の一變……………一六二

第三節 マンチエスター學派の謬見……………一六八

第四節 擴大論の改進……………一七二

第五節 列國の屬領……………一七六

第六節 財政上の觀察……………一八一

第七節 經濟上の觀察……………一九二

第八節 兵事上の觀察……………一九五

第九節 斷案……………二〇三

第九章

他日の機會

二〇九

第一節 偃武後の形勢……………二〇九

第二節 列國の先鞭……………二一三

第三節 斷案……………二一七

第十章

帝國の天職

二一九

第一節 人類の惠福……………二二一

第二節 世界の利益……………二二四

第三節 義兵の結末……………二二九

支那處分案

學堂居士著

緒言

世界の歴史は、幾んど皆な戦争史に非ざるはなし。然れども上下三千年の久しき、其關係、日清戦争の如く至大至宏なるものは有らす。見よ其結末如何は、啻に東亞全局の安危に關係するのみならず、亦歐米列國の利害に影響するに非ずや。

單に其地域人口のみにて就て言ふも、支那帝國は、歐羅巴全洲に超過す。支那の興廢は、歐洲全土の興廢に超過するの大事變なり。況や日清兩國の勝敗は、大に文明の消長、道義の興廢、貿易の盛衰、陸海軍備の變更を招致すへきをや。

世人皆な今回の戦を目して、文野の戦と云ふ。余も亦其然るを信するものなり。然れども單に此に止らすして、亦仁と不仁―義と不義―秩序と紛亂―慈愛と暴虐―改進と保守―自由と壓抑―立憲と専制―交通と鎖攘―の戦なることを知らざる可らず。

二者果して何れか勝たん。其勝敗は、必ず世界の風尚、人間の福利を一變す。其利害の重大なる、其關係の宏遠なると、凡そ此の如し。宇内列國の、深く之に注目するは、蓋し偶然ならざるなり。而して余は竊かに其尙ほ足らざるを惜む。

出師の目的は、東洋永遠の治安を保維し、兼て世界共同の福利を増進するに在り。之を他の私利私益を經營するの戦鬪に比すれば、其差霄壤、素より日を同ふして談す可きに非ず。

然れども、如何せば、以て此高遠雄偉なる目的を達するを得べき乎。旭旗の向ふ所、水陸風靡し、四百餘州悉く震懼するは、毫も疑を容れずと雖も、是れ未だ以て東洋全局の治安を永遠に保維し、宇内列國の福利を間接に増進するに足らざるなり。如何せば、以て此目的を達するを得べき乎。

滿漢四億の民衆を打起して、與に開明の福途に上ることを得せしめば、以て我が目的の一部を貫徹するを得へし。然れども彼れ苟も復讐の邪念を抱藏せば、東洋の治安を保維すると太た難し。大に彼か國力を削殺せば、以て彼をして再起復讐する能はざらむるを得へし。然れども彼れ大に衰弱して、政令四境に行はれざるに至れば、歐人東侵の端必ず是れより發けん。是れ東洋の治安を保維する所以に非ざるなり。

思ふに他日東洋の治安を擾破すべき者二あり。歐人の東侵は、其

一。支那の再起復讐は、其二。

我は一擧して此二患を杜絶せざる可らず。而して之を爲すの道亦二あり。一に曰く日清同盟。二に曰く支那攻滅。

ビスマークの故智(對壞政畧)を學ひ、戦後清國の甘心を收め、之を誘導扶翼して、深く之と結托せば、以て東洋の治安を保維するを得べし。然れども之を爲すと、啻に容易ならざるのみならず、之を爲さんと欲せば、先づ清國の運命を考査せざる可らず。蓋し彼れ若し必亡の運命を有せば、是れ可言不可行の空論なればなり。支那の運命果して如何。

清國を攻滅して、四百餘州を我か版圖に收め、以て其民の頑眠を覺まし、其兵馬を訓練し、其政制を改進せば、以て東洋の治安を保維し、以て列國の福利を増進するを得べし。然れども之を爲すに方では、先づ我か國力之に堪ゆるや否やを審慮せざる可らず。我が國力果して如何。

若し之に堪ゆるとせば、次に其利害を講究せざる可らず。併領の利害果して如何。

凡そ此等の疑問は皆な余か讀者と共に講究解釋せんと欲する所の者たり。而して其關係する所は、獨り國運の消長に止らず、亦實に東洋全局の安危に及ひ、世界列國の利害亦之に伴ふ。故に之を論斷するに方では、單に自國の利害にのみ着眼するを得ず。又内外親疎輕重の辨別を顛倒す可らず。其事至大にして、其業亦至難と云ふべし。余の淺陋なる、素より以て之に當るに足らずと雖も、忠愛の微衷、黙せんと欲して黙する能はず。乃ち爰に卑見を論述して、憂國者の深慮を促す。

第一章 東亞の長計

亞細亞の
衰勢

亞細亞の北西南三隅は、既に歐洲勢力の侵食する所と爲り、其中
 央部の如きも、岌々乎として夫れ危きに至れり。餘す所は、唯だ
 東方半壁の地あるのみ。細言すれば日清韓三國の、尙ほ侵畧を免
 るゝあるのみ。而して韓廷は、我の庇蔭に賴て、僅かに其邦家を維
 持し、清廷は我に抗敵して、海陸連敗し、其存亡將に圖る可らさら
 んどす、今日に方り、東亞全局の運命を隻手に握る者は、我か、大日
 本帝國に非ずして、誰ぞ。

日本の大
責任

然り、帝國は實に東亞の主宰者と爲れり。東亞の興亡、一に我か掌
 中に歸せり。四億五六千萬の生靈は、其運命を、帝國の一決心に繫
 けり。其責任の重大なる、恐くは古今萬邦の未だ曾て見ざる所な
 り。

我か帝國臣民は、此大責任に稱ふの考慮と決心とを有する乎。彼
 の徒らに局隅の勝敗を喜憂するの外、別に餘念なき者、何と與に
 東亞の長計を語るに足んや。

東亞の長
計

何をか東亞の長計と云ふ。曰く四億五六千万の生靈をして、長く
 幸福安全を得せしむるに在り。其法如何。曰く東亞の治安を永遠
 に保維するに在り。治安なければ幸福なく、幸福なければ長計な
 し。

生民の塗炭の苦に陥れて「是れ東亞の長計なり」と云ふものある
 も、人誰か之を信せん。故に曰く「東亞の長計は、治安を保維し、四
 億有餘萬の生靈をして、長く泰平の恩澤に浴せしむるに在り」と。
 讀者若し之を疑は、去て宣戰の大詔を三復せよ。

第一節 地理的觀念

余は、四海一家、五洲同胞の博愛主義を執持する者なり。世の局量偏淺なる者が、漫に内外遠近の殊別を擴張するは、余の取らざる所なり。余は彼の亞細亞と云ひ、歐羅巴と云ふか如き稱呼は、何人之を命したるやを知らず、又敢て知るとを求めざるなり。故に此區域に據て、内外親疎の辨別を立るの意なしと雖も、如何せん、地理的觀念は、人の感情を制すると極めて強きを。

伊太利は、曾て地理的稱呼に過ぎざりし。然れども之あるか爲め、遂に統一の偉功を奏せり。

希臘は、曾て地理的名稱に過ぎざりし。然れども之あるか爲め、遂に獨立を回復せり。

波蘭土の名稱は、今ま尙ほ普露、墺の患を爲し、祖國の名稱は、幾

地理的名稱の勢力

多の曼人をして其生命をも忘れしむ。

地理的名稱の人心に入ると此の如く夫れ深し。今ま夫れ亞細亞の名稱は、前數者と、全く其類を異にすと雖も、尙ほ多少の感化力を有す。少なくとも歐米人は、亞細亞の一語を聞て、既に疎外の情を動かす。

世人の地理的觀念に富み、地理的名稱の爲めに動かさるゝと、凡そ此の如し。政治の實務に當るもの豈に此勢力を度外視す可んや。東亞の長計を策するに方ては、勢ひ亞細亞と云へる地理的、名稱及ひ之に伴ふの觀念を算入せざる可らず。

第二節 人種的觀念

人種的觀念に至ては、其勢力更に地理的觀念より深大なり。

人種の異同は、風俗、習慣、思想、好尚等の異同を生じ、此異同は、人

類、離合、聚散、親和、争鬭の原因と爲る。試に十九世紀の戦争を見よ。半は是れ人種の争鬭なるに非ずや。

人種異なるか爲めに、奥匈帝國の困難を來し、人種異なるか爲めに、愛蘭動もすれは獨立の色あり。黑白の相ひ和せざる、歐亞の相親まざる、歐米の相ひ親善なる、何れか人種の異同に因らざらん。余は敢て黨同伐異を好む者に非すと雖も、眼に宇内萬邦の人情皆な此に傾むくの事實を見る以上は、勢ひ俗情を制して、此勢力を利用せざるを得ず。

特に歐米人に至ては、人種的觀念極めて強し。彼の畛域を設けざると、北米聯邦人の如きを以てするも、尙ほ同一國民たる黒色人を侮蔑し、之と齒するを耻る者滔々皆な是れなり。

米人も、之を怨んで、骨髓に徹すと雖も、尙ほ愛蘭より來る所の

「廉價勞力」を拒絶せず、獨り支那人の移住を禁遏し、引て我が日本人に及ばんとするか如きは、其適例なり。博愛主義の米人尙ほ然り。況や割據主義の歐人をや。

就中、人種的觀念、最も強く、内外親疎輕重の別を立ると、最も嚴格なるを、英人と爲す。英人は天涯地角に在りと雖も、尙ほ自國の風俗習慣を固守して、異邦他種の人と混同親和せず。

余は躬自ら人種の異同より重きを置く者に非すと雖も、歐米人は常に此心情を超越する能はず。亞細亞幾億の生民亦然る以上は、決して此事實を度外視するを得ず。之を度外視して東亞の長計を策すれば、必ず全局の打算を誤る。

ピスマークは、嘗た政界の勇斷家たるに止らず、亦政界の深慮家なり。彼れの炯眼夙に人種の争鬭は、今後尙ほ久しく絶へざるへ

きを看破し、内外の政策、多くは此形勢に基て、設定したり。壞を破るの後ち、露と結托せずして、却て壞と結托せるか如きは、其一例のみ

第三節 永遠の治安及び福利

亞人互に結托して、永遠の治安を保持し、其福利を増進するを得は、是れ素より可なり、歐人と結托して、此目的を貫くを得は、是れ亦可なり。我か獨力以て之を爲すとを得は、更に可なり。要は治安を永遠に保持し、以て生民の福利を増進するに在るのみ。其術策の如きは、深く問ふべき所に非ず。

然れども前一節の言議をして、大過なからしめば、地理人種二様の觀念と、之に因て生ずる風俗習慣思想好尚等の殊異は、必ず内外親疎の別を生じ、黨同伐異の念を生ず。

歐米諸國
と結托す
るの患害

亞細亞人、或は此俗情を超脱するを得へし。歐米人は、決して之を超脱するを得ず(少なくとも今後百年間は)彼れ苟も此俗情に因て、離合進退する以上は、決して「遠交近攻」の策を行ふを得ず。詳言すれば、歐米諸國と結托して、東亞の治安を保維するを得ず。否な大に歐米人を容るゝは、黨同伐異の争因を他日に遺す所以なり。而して争因を遺すは、治安を永遠に保維する所以に非ず。

果して然らば、東亞の治安は、亞人と與之を保維するの外、他に道なきに非ずや。歐米諸國と結托するは、啻に治安を保維する所以に非ざるのみならず、却て之を攪亂する所以なり。

以上の所論に據て、余は爰に斷言すへし。

(一)東亞の長計は、東亞の治安を永遠に保維し、四億五六千萬の

生靈をして、其恩澤に浴せしむるに在り。

(二)地理人種二様の觀念と、之か爲めに生ずる風俗習慣思想等の殊異は、必ず黨同伐異の争因と爲る。故に歐米諸國と結托するは、却て東亞の治安を破壊する所以なり。

(三)東亞の長計は、主として其治安を保維するに在るか故、歐洲勢力の東侵と、支那の再起復讎とは、必ず之を杜防せざる可らず。

亞細亞の天地は、亞人自ら之を保有せざる可らず。蓋し是れ治安を維持し、幸福を増進するの捷徑なればなり。

此捷徑を進むに方ては、我れ獨行すへき乎、將た他日戰止むの後、清國と提携すへき乎。此問題を決せんと欲せば、先づ清國前途の運命を考查せざる可らず。蓋し必亡の國と提携するは、寧ろ治安

を妨碍する所以なればなり。清國は存せん乎、亡ひん乎。是れ余か、次章に於て解釋せんと欲する所の大疑問なり。

第二章 支那の運命

支那の盛衰興亡は、其影響する所極めて大に、極めて廣し。清人一朝懶眠を覺醒して、日將月就、遂に普佛と比肩するに至れりと假定せよ。乃ち優に五百萬の常備兵を養ふて、宇内に號令するを得べし。是れ英露の富強を以てするも到底企及する能はざる所たり。

五百萬の常備兵

支那寔に勃興して、普佛の域に躋るを得ば、其獨力能く歐洲列國に抵敵するに足れり。其盛衰興亡に因て生ずへき影響の偉大なる素より辯を待たす。

支那は、勃興せん乎、衰亡せん乎、將た今後數十年間は、現狀に留滯すへき乎。外來の勢力は、暫く措て論せず、支那固有の獨立力の有無強弱果して如何。

先きに佛清の間ニ事あるや、清使曾紀澤は大言して曰く「支那は睡れり。爾後蹶起すへし」と。爾後既に十星霜を閱すと雖も、支那尙ほ依然として華胥郷裡に在り。

方今の傾奪世界に處して、其國を保たんと欲せば、之を保つとの要素なかる可らず。而して道義、兵力、元氣、統制力、忠愛心、團結力の如きは、皆な保國の要素たり。支那若し此諸要素に富めば、危變に處して、其國を全ふするを得へし。苟も諸要素を有せざれば、他の庇蔭に頼ると雖も、尙ほ遂に衰亡を免れず。

第一節 支那人の國家思想

民の國家思想は、保國の一大要素なり。故に民に國家思想なければ、兵力強大と雖も、其國必ず亡ぶ。而して支那人は、未だ國家の何者たるを知らず。焉んぞ國家思想あるを得ん。

支那に在ては、朝廷は則ち國家にして、首都は則ち朝廷なり。故に首都陥れば、朝廷從て亡ひ、朝廷亡ふれば、國家即ち亡ぶ。秦國は子嬰の投降に因て亡ひ、漢國は漢廷と與に亡ぶ。魏、晋、隋、唐、宋、元明、皆な然らざるはなし。是れ支那の大に世界列國に異なる所なり。支那は古來朝名を以て、國名と爲し、朝廷變すれば、即ち國名を改む。其外より來て國土を併畧せる者と雖も、皆な都を侵畧地に定め、之を其屬邦と爲さず、却て其本國と爲す。元清の如き則ち是なり。古來の習行實に此の如し。故に支那人は、朝廷の外に、國家あるとを知らず。「普天の下、王土に非ざるはなく、率土の濱、王臣

支那人は
國家の何
者たるを
知らず

に非ざるはなし」朝廷は則ち土地人民の所有者にして、朝廷則ち是れ國家なり。路易十四世か所謂る「朕は則ち國家なり」の一言は、支那に於て始て其事實を見るを得べし。

彼の查列斯列られて、英國尙ほ存し、那翁降服して、佛國尙ほ亡ひざるか如き事迹は、支那人の解する能はざる所なり。

古來の理論習行、兩つながら此の如くなる以上は、支那人が國家の何者たるを知らず、從て國家思想なきは、毫も怪むに足らず。

好し國家の何たるを知らずと雖も、彼等若し萬世一統の君主を戴くと我か帝國臣民の如くならば、之に因て、大に忠義心敵愾心

を養成するを得べく、從て國家思想を起し、愛國心を發動するを得べし。然るに支那は數々其君主を替へ、内外貴賤諸般の人物、代

る々々之に君臨したるを以て、人民の朝廷を視ると逆旅の如く、

朝廷の人民を視ると動もすれば仇敵の如くなるに至る。慈母赤子の關係に至ては、唯た之を學者の空言に聞くのみ。乃ち忠義心の薄弱なるは、毫も怪むに足らざるなり。

既に愛國心なく、亦忠義心なしと雖も、人民互に相ひ親愛して、團結力に富めは亦た以て保國の要素を補ふに足れり。然るに秦山

楚水互に隔絶して、交通機關全く缺乏するが上に、境域過大にして

て東西南北大に其風土習俗利害を異にし、甚たしきは則ち本部の人と雖も、重譯を経て、始て言語を通するに至る。其の民何に因てか團結心を生ずるを得ん。

國家思想、忠義心、愛國心、團結力は、皆な保國の要素なるに、支那人一も之を備へず。此の如くにして、獨立を傾奪世界に保全し得

たる事例は、余の未だ曾て知らざる所なり。

支那人の
大缺點

第二節 支那人の政治思想

官吏に健全なる政治思想なしと雖も、人民若し之に富めば、以て之を矯正して善政を施さしむるを得へし。

人民に健全なる政治思想なしと雖も、當局者若し之れに富めば、以て牧羊主義の善政を施すを得へし。

上下擧て政治思想なく、官民共に腐敗せる者に至ては、到底其治安を保全する能はず。蓋し健全なる政治思想は保安持國の一大要素なればなり。

支那人の政治思想の有無厚薄を知らんと欲せば、去て歴代名臣奏議集を讀め。浮華の言、迂遠の議、滿紙皆な是れなるに非ずや。

貞觀の隆治は、當時稱して無双と云ふ。炎漢亡ぶるの後ち、世に豪傑なきと四百有餘年。晋隋僅かに小康を得たりと雖も、叛亂相ひ

繼ぎ、生民塗炭の苦を免れず。唐其後を受けて泰平を致せるは、毫

も怪むに足る者なし。貞觀政要に依て、其一斑を窺ふも、亦た以て政道の卑低なるを知るに足れり。

同治の中興は、近世無比の偉業と稱せらる。而も中興奏議集の記

する所は、別に讀者を啓發するに足る者なきに非ずや。

支那人は文學思想ありと雖ども、政治思想なし。故に其政治上の奏議論策なるものも、多くは是れ文學上の述作たるに過ぎず。

轉じて政治上の實行を見るも、亦以て政治思想なきを證するに足れり。

彼等は幾ど收賄の惡事たるを解せず。故に官吏にして、賄賂を要求せざるものなし。平壤の敗將衛汝貴が、兵士の俸給糧食を横奪して、私囊を肥せるか如きは、決して稀有の事例に非ず。

支那人は文學思想有て政治思想なし

各省の總督巡撫は、養兵費を受くと雖も、常に之を私して、定數の兵馬を訓養せず。

租税を徵課するに方ては、定制以外の巨額を收斂し、動もすれば則ち無辜の富者を逮捕して、賄賂を強ひ、甚たしきは則ち其貨財を籍没するに至る。孔子が「收斂の臣あらんより寧ろ盜臣あれ」の激語を放てるを見れば、太古も亦今日の如くなりしと思はる。彼れ苟も教を百世に垂れんと欲するもの、豈に故なくして此激語を放たんや。

李鴻章は數千萬兩の富を致し、道臺は俸祿多からすと雖も、尙ほ「道臺三年萬世安」の諺あり。不正の利を征せずして、焉んぞ能く此の如くならんや。

官吏の撰任は、試験に由ると云ふと雖も、其實概ね賄賂を以てす。

故に秀才進士に金を貸し、就官後其利を分つを以て、營業と爲す者あり。此輩は受験者を視て商品と爲し、官吏を視て株券と爲す。既に數萬若くは數十萬兩を放下して、及第仕官を競争す。勢ひ亦収賄籍没其他萬般の不正手段を施して、其放下せる資本を回収し、且つ利益を財主に分配せざるを得ず。

清廷か、俸給以外に養廉銀を給するか如きは、官吏不正腐敗の事實を公認せるものと云ふべし。

官吏は職權を濫用して、民財を奪はんと計り、人民は詐術を以て之を免れんと圖る「上下交も利を征て國危し」とは、夫れ此の謂ひ乎。

政治の要は、民をして安寧幸福を得せしむるに在り。然れども以上列記の行爲は、啻た此目的に背くのみならず、却て之を傷害す

官職は商品、官吏は株券

清廷は官吏の不正腐敗を公認す

る所以なり。

支那人は健全なる政治思想を有せず、其所謂る政治思想なるものは、私利經營の思想に過ぎず。遠く泰西人を聘用して、全國二十ヶ所の税關官吏と爲すか如きは、此事實を證明する者と云ふへし。支那人は、今ま尙ほ泰西人を蠻夷と爲し、之を呼ぶに洋鬼子若くは外魔を以てす。彼れ決して歐米人を好愛する者に非ざるなり。故に萬止むを得ざるの情あるに非ずんば、決して之を雇聘せず。海軍に西人を用ゆるは、自力を以て戰艦を操使する能はざるか爲めなり。擧國の税關悉く外人を用ゆるは、亦自力を以て其事務を施行する能はざるか爲めなり。

支那官吏は、收賄盜竊を以て人間の常事と爲す。故に之を税關に用ゆれば、檢査に方て物貨を盜み、徵税に際して賄賂を強求す。支

擧國の税關に泰西人を聘用する理由

那商人に在ては、毫も之を怪ますと雖も、税關に出入する商賈は、不幸にして竊物要賄を甘受せざるの外國人多し。故に支那官吏をして、税關の事務を執らしむれば、紛議百出、動もすれば國際上の葛藤を生ず。是れ清廷か擧國の税關には、悉く高給難御の泰西人を聘用する所以なり。

支那人は、簡易なる税關事務すら、尙ほ正當に之を執行する能は。況や爾他萬機の政務をや。

以上の事實と觀察とに基き、余は茲に斷言す。支那人の政治思想は、タトへ有りとするも、極めて卑く、其政治上の行爲は、實に腐敗醜汚を極む。吾人若くは歐米人の享受するか如き廉潔嚴肅なる政治は、支那人の曾て知らざる所なり」と。

切言すれば、支那人は古來未だ生命財産の安寧を得たると有ら

さるなり。

官民共に政治の何者たるを知らざると、此の如くにして、而も天下益々多事なるの今日に於て、其治安を保ち、其獨立を全ふするは、到底能くすへきの業に非ず。

第三節 支那人の戦闘力

國民の戦闘力も、亦保國の一大要素なり。而して一國の内尙ほ地に文武の差あり、民に勇怯の別あり。九州の壯武にして、中國の文弱なるか如き、則ち是れなり。四海の廣き、民種の多き、國民に文武勇怯の大差あるは、理勢の當と然るへき所とす。

之を歴世の事迹に徴するに、支那人は尙文の民にして、尙武の民に非ず、好利の民にして、好戰の民に非ず。

今日の連戰連敗は、其近因多しと雖も、其遠因大因は支那民族の

連戰連敗
の遠因

性情に在り。

支那人をして、苟も尙武好戰の民ならしめば、今日に至るまで、其兵馬を訓練せざるの理なし。好し兵に訓練節制なきも、今日の如く脆弱なるの理なし。故に余は連敗の主因を以て、支那民族の性情に歸す。

彼等は、素と尙文好利の民なり。故に建國以來二千八百年の久しき、未だ一撃以て人を斬殺するに足るへき武器を發明せざるに似たり。歐陽永叔が日本刀の歌は、以て支那に之に類似するの武器なきを證するに足り、明末倭寇の記事も、亦以て同一の事實を證するに足れり。彼の後晉の景延廣が「孫有十萬橫磨劍、足以相待」と云ふを以て、畢生の傲語と想へるか如きは、劍戟皆な鏽腐を常とするの一證には非ざる乎。然らすんは、何を故らに磨字を用

て、誇るを要せん。

歐洲諸國の博物館中には、間ま支那の武器を藏する者ありと雖も、未だ一撃以て人を斬殺するに足るべきものを見ず。我が遊就館の所藏、牙山平壤旅順の戦利品等に就て見るも、亦絶て之れあるとなし。故に「支那に固有の武器なし。其の所謂る武器なる者は、人を殺すの具に非ずして、寧ろ之を威嚇するの具なり」と斷言するも、蓋し過なきに庶幾らん乎。

既に武器なし。焉んぞ戦あるを得んや。其の所謂る戦なる者は、日本及び歐米諸國の者と、全く其類を異にす。

清兵か、旌旗、銅鑼、雨傘、提打等を携帶するの多きは、實見者の皆な驚く所なり。苟も戦を知る者は、此の如き無用の長物を以て、兵士の手足を束縛せざるべし。

古來支那に武器なし

支那の戦は旗鼓の競進會

余曾て支那に於ける戦字を解釋して「旗鼓の競進會」と云へり。言或は諧謔に近しと雖も、亦決して失實の言に非すと信す。

支那人動もすればは兩軍對峙の形勢を叙するに「旗鼓相ひ當る」の文字を以てす。是れ單に詞客の形容辭に止らざるなり。

彼等は實に旗鼓を以て戦ふなり。鼓聲天地に轟き、旌旗山野を蔽ふ者は、勝者にして、旗數足らず、鼓聲如かさる者は、敗者なり、二千有餘年の久しき、支那の戦争は、畢竟此類の者たるに過ぎず。彼の斬首幾萬級と云ふか如きは、畢竟詞人浮誇の言なるのみ。

更に切言すれば、支那の戦は軍容の戦にして、軍器の戦には非ず。今や大に歐米の武器を誘入し、戦争の性質、俄然一變したり。然れども二千八百年間、唯た旗鼓の競進會を事としたる尙文好利の民族は容易に眞誠の戦争を學習し得へきに非らず。故に兵卒死

節制訓練
を経ても
支那兵は
尙ほ怯弱
なるを免
れず

すれば將校走り、將校傷つけは全軍潰ゆ。戰場は是れ殺人場なる
とを知らざる者の如く然り。

世間或は節制訓練の力、能く弱を轉じて強と爲すを得へしと説
く者あり。此言素より然り。然ども之を尙武民族の節制訓練を經
たる者に比すれば、尙ほ弱者たるを免れず。況んや節制訓練は、利
慾の奴隸たる支那人の到底完成する能はざる所なるをや。

掠奪は軍隊の嚴禁なり。故に掠は變にして、不掠は常ならざる可
らず。然るに古今の支那史は、皆な掠奪を筆誅せずして、却て不掠
を特筆大書す。支那に在ては、古來兵士は暴横掠奪を常とするの
情以て察すべし。一朝古來の習性を變革するは、望むべくして、得
可らざるの業たり。

前五六十年間、歐米の兵を被むると數回に及び、節制訓練の必要
は、數々之を實驗したりと雖も、現状尙ほ世人親見する所の如し。
平壤旅順の要害堅固なるを以てするも、之を守て二日を支ふる
能はず。

躬自ら此事實を見聞するも、尙ほ支那人に節制力あり、戰鬥力あ
りと云ふとを得へき乎。

皇師一たひ海を渡て、百疑烟散せり。故に余は多言せず、唯た斷言
せん。

- (一) 支那民族の性情習慣は、尙文好利にして、尙武好戦に非ず。
- (二) 尙文好利の民は、節制訓練の功を積むも、尙ほ他の尙武民族
に匹敵する能はず。
- (三) 道義心に缺乏し、上下交も相ひ欺くを以て其常習と爲すの
支那人は、到底節制訓練の實を擧る能はず。

(四)支那に固有の武器なし。其所謂る武器なるものは、殺人器に非ずして、嚇人器なり

(五)既に武器なし。故に亦戦あるべきの理なし。支那人の所謂る戦なる者は、旗鼓の競進會のみ。

概して之を論すれば、支那人の戦闘力は、今後永く、水平線以下に留停せざるを得ず。此の如き民族も、亦尙ほ今の争奪世界に處して、其獨立を保全するを得へき乎。曰く否、斷して否。

第四節 支那人の道德

道德の汚隆も、亦國家存亡の要素たり。道德頽廢すれば、綱紀必ず壞亂す。而して國家衰亡せざる者はあらず。

支那人に政治的道德なきの事實は、余既に前節に於て、之を畧説せり。然らば會社の道德は如何。支那人の道德思想を支配するに

支那人は古來言と行とを別観す

支那の文章は常に違ふ事實に違ふ

與つて、最も力ある者を、儒道佛の三教と爲す。其教義善美ならざるに非ずと雖も、不幸にして支那人は、古來言と行とを別観するの習癖あり。其言ふ所は、行ふ所に非ず。其行ふ所は、言ふ所に非ず。言行一致を貴むの思想は、其最も缺乏する所たり。

特に其文章の如きは、唯た浮誇皇張を是れ事とし、其字句聲調を重んずると、遠く事實の上に出づ。故に字句聲調を修磨せんか爲めには、有無虚實を倒轉して、毫も怪まざるに至る。試に大家の記行文を執て、其實境と對照せよ。山川、草木、方位、大小、廣狹等の齟齬する者極めて多きを見ん。

案内記の如きは、最も實境實事に違はざるを要すも者なり。然るに其支那人の手に成れる者は、大抵事實を失し、旅客を誤まる。爾他萬種の文章の孟浪不經なると推して知るべきのみ。

支那人は生來其地に居り、其事を見ながら、之に關するの記論、叙誌、說、史等を讀む。故に書籍は、皆な浮誇皇張にして、大に事實と齟齬する者なるを熟知す。文を修むるは、則ち詐偽を習ふ所以なるを熟知す。

書籍は、支那人に教ゆるに許多の善事を以てすと雖も、同時に亦善事は皆な筆舌上の善事にして、實行すべき者に非ざるを以てす。何となれば書中の記事論説は、概ね皆な事實と齟齬すればなり。彼等は、常に此心を以て、諸子百家の書を讀む。故に儒道佛の三教美ならざるに非すと雖も、支那人に取ても、遂に机上の空言たるを免れず。單に空言たるに止らば、尙ほ可なり。動もすれば則ち彼等に教ゆるに、口を道德上の美言に籍て、世を欺き人を瞞するの術を以てす。

書は詐術を教ゆ

今日清國の俘虜が、詐涙を垂れ、異口同音以て「家に老母あり、侍養する能はざるを憾みとす」と説くか如きは、則ち教育に因て得たる詐術なり。彼等の内には、家に老母なき者必ず多からん。無じと雖も尙ほ之を説て、憐を乞ふ。蓋し古人先輩の詐禮に従ふなり。文章多くは虚偽なるか故に、支那人は書を讀む益々多くして、詐術を修得すると愈々深し。是れ教典美なりと雖も、毫も世に實効なき所以なり。

支那人の學問境遇既に此の如し。其變詐百出。幾と道德の何者たるを知らざるか如くなるは、蓋し怪むに足らざるなり。凡ろ盜竊は、利の爲めにすべき者なり。然るに支那人中には盜竊其事を好み、曾て利の有無を問はざる者太太多し。詐偽も、亦利の爲めにすべき者なり。之を爲して利なくんば、寧ろ

支那人は利益の目的なきも尙ほ詐偽を爲す
(五三)

爲さるるの優れるに如かず。然るに支那人は収利の算なきも、尙ほ詐偽を事とす、漢字新聞の記事論説多くは是れ虚偽捏造なるか如きは、其明證なり。古今支那の文章多くは皆な此の如し。何を獨り今の漢字新聞を怪まん。支那人か道德思想に乏しきの例證は、余之を知ると極て多しと雖も、多言を費さすして世人既に之を認許すへきか故、余は單に「支那人は政治的道德に缺乏するのみならず、亦社會的道德に缺乏す」と斷言するを以て満足すべし。虚妄、詐偽、無耻、無節、不義、無氣力にして、且つ盜竊を好むと、支那人の如きを以てするも、尙ほ今の文明天地に獨立するを得へき乎。曰く否、斷して否。

第五節 歷朝の命數

政治思想大に發達したる我か帝國に在ては、國家、朝廷、政府の區

支那には
國家朝廷
政府の區
別なし

別燦然見るへしと雖も、支那に在ては、混沌として辨識す可らず。政治機關備具せる邦國に在ては、三者各々其責任を異にすと雖も、支那に在ては、全く之を混同す。故に政府の失政は、其科責直ちに朝廷に歸し、政府を變換せんと欲せば、勢ひ朝廷を變換せざる可らざるに至る。而して朝廷變換すれば、國名亦從て變換す。支那には朝廷有て、國家なきなり。故に朝名ありと雖も、國名なし。此の如き混沌未開の邦國に於ては、執政者の過失は直ちに朝廷の責任と爲る。故に皇統連綿萬世一系の盛事を夢想するを得ず。其朝廷數々變換して胡兒賤夫も亦帝位に昇るとを得るは、理勢の當さに然るへき所なり。

支那皇帝は、自ら政務を執らすと雖も、尙ほ其責任を免るゝ能はず。帝德無愆の語はありと雖、未た其實を見ず。政制の混沌未開な

支那の朝廷は立憲に類似す

日本の政治は古來優天下に絶す

ると凡そ此の如し。乃ち支那朝廷の數々顛覆すると、歐米責任内閣の數々顛覆するか如くならざるを得ず。其異なる所は、唯た彼は言論の力を以てし、此は兵馬の力を以てするに在るのみ。立憲國の政黨に、盛衰興亡の變あると同じく、支那の朝廷にも亦之なきを得ず。蓋し或る意義に於ては、支那の朝廷は、立憲國の政黨と同一の地位に立ち、同一の責任を執ればなり。

誰か云ふ本朝の政制は、之を隋唐に學へりと。其細目末節に於ては寔に然り。其大本領は、我か獨制開基に係り、其善美遠く宇内萬邦の者に超過す。我は古來 帝室を責任以上の高地に尊崇し奉り、政務の責任は總て之を執政官に歸せり。歐人は近世に及んで、漸く此大義を發見したりと雖も、本邦に在ては建國以來常に之を實施せり。何者の蒙夫か敢て隋唐を以て、我か政制の師範と爲す。

我に在ては皇統連綿、彼に在ては王系數々變易す。其原因多しと雖も、彼に在ては古來責任を君主に歸し、朝廷と政府とを混同するの一事も、亦其一大原因ならずんはあらず。既に責任を之に歸す。朝廷數々變換せざるを得ず。既に數々變換す、既往の事迹に徴して、將來の命數を推すも、亦全く無用の業に非ず。

秦 帝と稱すると十五年

前漢 凡そ二百十年

後漢 凡そ百九十五年

蜀 凡そ四十二年

三國 魏 凡そ四十六年

吳 凡そ五十二年

西晉 凡そ五十二年

- 東晉 凡そ百四年
- 宋 凡そ五十九年
- 齊 凡そ二十三年
- 梁 凡そ五十六年
- 陳 凡そ二十二年
- 隋 凡そ三十七年
- 唐 凡そ二百九十年
- 後梁 凡そ十七年
- 後唐 凡そ十四年
- 五代
 - 後晉 凡そ十二年
 - 後漢 凡そ四年
 - 後周 凡そ十年

- 宋 凡そ百六十七年
- 南宋 凡そ百五十三年
- 元 凡そ八十九年
- 明 凡そ二百九十六年
- 清 今日まで 凡そ二百三十二年

歷朝の命數中、最も長きを、漢唐宋明清と爲す。漢は春秋戰國と暴秦との後を受けたるか爲めに、此久安を得、唐は南北朝大亂の後を受けたるか爲めに、此久安を得、宋は五代の大亂に繼げるか爲めに、此久安を得、明は胡元の後を受けたるか爲めに、此久安を得たり。知らず清は何の因由有て、漢に過ぎ唐に迫らんとするに至れる乎。

古來長城以外より入て、支那を蠶食せるもの太太多しと雖も、多

清朝の命
數は感豐
同治の間
に於て既
に盡きた
り

くは志を遂る能はずして亡ひ、元の雄強を以てするも、尙ほ九十年を待たずして亡ふ。是れ本部の文明遠く侵畧者の上に出るか爲めに非ざるなきを得んや。

然るに愛親覺羅氏獨り常則に漏れて、此隆治を致す。畢竟康熙乾隆二帝の遺徳に由ると雖も、亦他に原因なくんはあらず。

清朝の命數は、咸豐同治の間に於て、既に全く盡きたりと雖も、英佛諸國は貿易の利を貪るか爲めに、強て之を保存するの政策を執れり、故に攻めて北京に入れるも、尙ほ極めて寡少の要求に満足せり。加之のみならず將士を危朝に貸して、遂に強敵洪秀全を撲滅したり。

英佛をして其内亂に乗せしめば、清朝は北京陥落に繼て、亡滅したるを疑はず。英佛をして内亂を傍觀せしめば、天下を三分して其二を掩有せるの洪秀全は、愛親覺羅氏に代て、四百餘州に君臨したるを疑はず。

清朝の命數は、咸豐同治の間に盡きたり。其餘命を今日に全ふるは蓋し僥倖なるのみ。

清國は咸豐年間に於て、既に内外より其頭腦を打破せられたり。其今日に存する者は、清國の形骸のみ。精神を備具したる邦國には非ざるなり。

第六節 斷案

前五節の畧論をして太過なからしめば、何れの點より觀察するも、清國の運命は既に窮盡せり。

因て以て國家の獨立を保全すべき要素は、清國一も之を完具せざるのみならず、亦更に之を回復すべき望なし。唯た僥倖なるは、

清國は列國の誤解に因て生存す

列國未だ此形勢を知らざるの一事に在りと雖も、今や本邦先づ誤謬を看破して、歐米列國亦漸く之を悟らんとするに至れり。列國の誤解に因て存立せる清國は、誤解の消滅に従て滅亡せざるを得ず。

我か帝國を始めとし、歐米列國皆な誤解を繼續して、清國の覺睡蹶起を期し、之に屬するに無稽の空望を以てせば、支那或は其扶翼に由て僅に餘命を延長するを得へし。然れども此の如き解誤は決して永續すへき者に非ず。

清國の運命既に必亡に在りとせば、内より亡ふへき乎、將た外より亡ふへき乎。曰く内亂外寇交も至るか爲めに亡ひん。

何に由てか之を言ふ。曰く列國は決して亂麻の形勢を坐視する者に非ず。故に大亂内に起れば、外寇必ず至る。又唯た利慾心有

内亂外寇交も至るは清國の亡因なるへし

て毫も忠義心なきの支那人は、決して外寇に乗して、叛亂掠畧を爲すの利を傍看する者に非ず、故に外寇至れば内亂必ず生ず。内亂外寇の交至は、清國の亡因なり。而して其期近く目睫の間に在り。

第三章 列國の對清政略

今の歐米列國中、平生支那に對して、政略の名に背かざる者を有するは、唯た英、佛、露、曼、米、五國あるのみ。他の諸國に至ては、幾ど利害の關係なし。素より對清政畧あるへきの理なし。

右五ヶ國中佛露の關係は、主として領域に在り。曼米の關係は、主として商業に在り。領域商業二様の關係共に深大なるを英國と爲す。故に列國の對清政略中特に觀查の價あるは、英國にして、露

英國の關係最も深し

佛之よ亞き、曼米又之に亞く。此他の諸國の如きは、唯た事あるに方て之を區處するに過ぎず。今ま之を觀查せずして可なり。

第一節 英の威迫政略

英は東印度商會の手を経て、支那と貿易すると、幾と二百年、千八百三十四年に至り、始めて該商會の獨占權を廢し、英國臣民をして悉く支那貿易の經營權を得せしめたり。時に勇猛敢爲を以て一世に雄飛せるパーマーストン卿外務に大臣たりしを以て、忽ち清國と爭端を發き、後ち八年を経て、遂に清國をして五港を開き香港を讓與せしむ。後ち又十四年を経て海賊船アルロウ事件あり。香港太守ボウリング廣東領事パークス後ち我が國駐紮全權公使と爲れる人等專斷を以て變端を發き、遂に廣東城を砲撃す。詳報英國に達するや、保守黨主として其暴虐を咎め、舉國幾と之に響應す。閣員も亦皆

英相パーマーストンの支那政略

香港太守廣東領事等の暴横

な太守領事等の暴行を不可とし、之を譴責して其責任を免れんと欲す。然るに首領パーマーストン卿獨り衆議を排して曰く「諸君過てり。大聲疾呼して英旗の侮辱を説かば、英獅の睡眠を覺醒し、輿論の風潮を轉回せしめんと、蓋し容易の業なるのみ」と。閣議遂に是れに一決して、太守領事等の暴行を贊助せり。而して一世の風潮は果して首相の豫言に違はず俄然一變したり。後又三年を経、バ卿再ひ入て首相と爲るや、口を支那か約に背て互市場を開かざるに籍て、英佛同盟軍を起し、清廷をして北京城下の盟を爲さしめたり。

威迫政略

(七四)

當時バ卿の支那政略は唯た威迫の二字に在りたり。卿は常に「支那人の瞭解し得べき言語は、唯た威力の言語あるのみ」
(Intelligible The only intelligible language to the Chinese is the language)

ge of force)と云へる主義を固執せり。故に其對清政畧の暴虐無道なりしは、眞に惡むへしと雖も、英國をして支那貿易の利益を壟斷せしめ、支那に對して今日の如き大勢力を掌握するに至らしめたるは、實に卿の力なり。

他の政治家は概ね皆な自然の發達を待つを以て満足したりと雖も獨り、バ卿に至ては、初めより威迫を以て支那貿易を開かんと欲し、其政府に在るに方ては、絶へず此政畧を施せり。卿は英人の誇稱して當世無双の外交家と爲せる傑物なり。乃ち臨機應變忽ち局面を一變するか如きは、其素より長する所たり。故に巧みに佛國を操縦して、同盟軍を起さしめたりと雖も、痛く清廷を膺懲するの後ち、忽ち深く之と結托して兵事上貿易上の利益を獨占せんと欲するの思想は、出師の初めに於て既に卿の腦中に往來せり。卿は同盟軍尙ほ征途に在るに方て、既に局面轉換の計に着手し、特派全權公使エルチン卿に密命を與へて、懷柔結托の秘計を施さしめ、同時に亦益々遠征軍隊を増發して其威武を輝かせり。

初は唯た貿易の利を主とし此に至るは兵零上の利を兼收せんと欲す

英國首相の計策既に此の如し。故に千八百六十年の役、同盟軍が北京に入れるは、清廷を撃碎せんか爲めに非ずして、寧ろ之を扶持誘掖せんか爲めなり。之を惡むか爲めに非ずして、寧ろ之を愛するか爲めなり。繼母疾惡の苛責に非ずして、寧ろ慈母恩愛の懲戒なり。佛廷或は之を知らざるへし。清廷素より之を知るへきの理なし。英國首相腦中の秘計は、實に此の如くなりしなり。故に北京攻陥後の要求は、唯た互市場の新開少額の賠償等に過ぎず。之を阿片戰の要求に比すれば、其寡少なると實に驚くに堪

へたり。
帝に北京政落の大事件後に於て、太寡少の要求を爲して、清廷の歡心を買へるのみならず、亦武將軍器を危朝に借して其滅亡を救へり。是れ第二支那戦争の最も奇なる所に於て、其妙亦實に此に在り。

後ち人あり、議院に於て支那政略の矛盾撞着を痛撃す。閣員皆な其理あるに服し、茫然として答ふる所を知らず。時にパーマーストン卿冷然起立し答へて曰く「右手之を撲ち、左手之を撫す、天下豈に事の是より公平なるものあらんや」と。滿院皆な絶倒し、流石の痛撃も忽ち嬉笑聲中に埋没せられたり

巴卿が威迫を以て唯一の支那政畧と爲せると、幾と二十年。此に至て俄然其方向を一變し、危朝を垂亡に救ふて、其歡心を收攬し、清廷をして唯た英の倚賴すへきを見て、其毫も嫌厭すへきを見

英相の對
清政畧全
く一變す
蓋し露に
對して兵
事同盟を
爲さんど
欲するか
爲めなり

ざるに至らしめたり。轉化の妙、人をして嗟嘆に堪へざらしむ。爾後六年ビスマーク伯が施せる對澳政畧は、蓋し巴卿の故智を襲へるなり。

第二節 英の懷柔政畧

英國は清廷將に亡ひんとするの危機に乗じ、俄然威迫政畧を一變して懷柔政略と爲せり。巴卿の如きは善く恩威並行の術を解せるものと云ふ可きなり。

爾後茲に三十四年、英は常に清國を扶翼し、保護誘掖至らざる所なし。長髮賊を討つか爲めにはゴルドンを借し、關稅事務を整理するか爲めにはロバート、ハートンを借し、海軍を建設するか爲めにはラングを借し、外務顧問としてはマッカルトニーを借せるか如きは、事迹の特に著明なるものとす。

先きに威迫政略に由て開創せられたる貿易の利益は、懷柔政略に由て愈々増加せり。英及び其屬領に對する支那の輸出入貿易は一億六千五百萬兩の多きに及ぶと雖も、他の歐米列國に對する者は、之を總合するも、尙ほ四千六百萬兩に過ぎず、諸名士皆な論鋒を攢めてパーマーストン卿の威迫政略を痛撃せりと雖も、社會公衆は今に及んで尙ほ卿の勇斷果決を謳歌するは、蓋し偶然に非ざるなり。

英の東洋政略を動かすに於て最も力あるは、内地の製造家と、在外の貿易商なり。パ卿の支那政略は、前後全く其形を異にすと雖も、支那貿易を擴張して、右二様の種族を利せんと欲するの精神に至ては、則ち一なり。英の支那政略は、則ち是れ産業政略なり、又是れ貿易政略なり。故に和戰剛柔變化極りなすと雖も、要する

に唯た算盤上の利益を保護増進せんと欲するに外ならず。

英人と雖も、支那の運命は必亡に在ることを知らざるに非ず。唯た彼等は其存する間は、百計恩を賣て、貿易産業の利を攫み、其遂に救ふ可らざるに至るや、即ち一搏直ちに併吞せんと欲するのみ。此策や英國之を支那に施すのみならず、亦之を土耳其機に施す。蓋し是れ死生存亡兩つなから巨利を壟斷するの秘訣にして、所謂賣恩待斃策なる者なり。

黨に改進黨保守の別あり、人に貴賤上下の差ありと雖も、賣恩待斃を以て、支那に對する最好政策と爲すに至ては、則ち一なり。英國の國論は、此點に於ては全く一致せり。時に細目の手段を異にする者なきに非すと雖も、其要旨に至ては萬口一音、幾と復た一人の異議者あるとなし。

賣恩待斃
は英人得
意の政略

故に露清北に戦へば、英は頻りに露を妨碍し、佛清南に戦へば、英は大に佛を牽制す。日清交戦の初に方て、英人が口を極めて支那を揚げ日本を抑へたるか如きも、亦事迹の特に顯著なるものに非すや。

對土政畧
を移して
對清政畧
を爲す

初は唯た産業貿易の利を得んと欲して、威迫政略を施せるも、後ち露の東侵南下愈々急猛なるに及び、英は歐洲に於ける對土政略を移して、直ちに亞細亞に於ける對清政略と爲せり。是れ懷柔政略の由て起れる所以にして、其目的は産業貿易に兼ねるに更に兵事上の利益を以てせんと欲するに在り。細言すれば、支那と結托して與に露の南下を防かんと欲するに在り。蓋し是れ英清共同の憂患なればなり。

其目的唯た貿易産業の利益に止まるも、威迫政略は其初を發く

懷柔政畧
の止む可
らざる所
以

所以にして、其終を完ふする所以に非す。況や更に兵略同盟の利益を收めんと欲するに於てをや。深く清廷の歡心を得るに非すんは、決して此目的を貫く能はず。故に英は之を收攬せんと欲して、日夜怠る所なし。現に千八百八十七年露兵、亞弗業に入り印度の邊境漸く將に危ふからんとするや、英は鴉片の釐金を、海關に於て併徴することを諾し、以て頗る清廷の歡心を買へり。平時に在ては、貿易産業の利益を占め、戦時に在ては、兵略同盟の功績を収めんと欲す。英の對清政略は、恰も兩頭の蛇の如し。知らず、此怪蛇政畧は、能く其目的を達すへきや否や。

懷柔政畧
の二大目
的

第三節 英國政界の變狀

支那と結托して、共々與に露の南下を防かんと欲するは、英の對清政略の二大目的の一なり。故に英は頻りに支那を誘掖して、其

故に露清北に戦へば、英は頻りに露を妨碍し、佛清南に戦へば、英は大に佛を牽制す。日清交戦の初に方て、英人が口を極めて支那を揚げ日本を抑へたるか如きも、亦事迹の特に顯著なるものに非すや。

對土政畧
を移して
對清政畧
を爲す

初は唯た産業貿易の利を得んと欲して、威迫政略を施せるも、後ち露の東侵南下愈々急猛なるに及び、英は歐洲に於ける對土政略を移して、直ちに亞細亞に於ける對清政略と爲せり。是れ懷柔政略の由て起れる所以にして、其目的は産業貿易に兼ねるに更に兵事上の利益を以てせんと欲するに在り。細言すれば、支那と結托して與に露の南下を防かんと欲するに在り。蓋し是れ英清共同の憂患なればなり。

其目的唯た貿易産業の利益に止まるも、威迫政略は其初を發く

懷柔政畧
の止む可
らざる所
以

所以にして、其終を完ふする所以に非す。況や更に兵略同盟の利益を收めんと欲するに於てをや。深く清廷の歡心を得るに非すんは、決して此目的を貫く能はず。故に英は之を收攬せんと欲して、日夜怠る所なし。現に千八百八十七年露兵、亞弗業に入り印度の邊境漸く將に危ふからんとするや、英は鴉片の釐金を、海關に於て併徴することを諾し、以て頗る清廷の歡心を買へり。平時に在ては、貿易産業の利益を占め、戦時に在ては、兵略同盟の功績を収めんと欲す。英の對清政略は、恰も兩頭の蛇の如し。知らず、此怪蛇政畧は、能く其目的を達すへきや否や。

懷柔政畧
の二大目
的

第三節 英國政界の變狀

支那と結托して、共々與に露の南下を防かんと欲するは、英の對清政略の二大目的の一なり。故に英は頻りに支那を誘掖して、其

武備を整頓せしめんとを力めたり。政略一變後、其成功を待て既
よ三十餘年の久しきよ及へり。心竊かに陸海軍備の大進歩を期
せり。何ぞ圖らん、支那の羸弱なると、今も猶ほ昔の如くならん
は。

英人中漸
く既往三
十餘年の
過を悟る
者あり

日清の交戦は、英國に與ふるに一大恐慌を以てしたり。英人中の
聰明なるものは、愕然として兵略上支那の結托するに足らざる
とを悟れり。之と結托するは、却て累を自國に及ぼす所以なるを
看破せり。之を看破すると同時に、亦日本の意外に壯武なるを
看破せり。支那の歡心を収めんか爲めに、此の如き強國の敵意を
買ふは得失相ひ償はざるを看破せり。其輕銳なる者は、更に一
歩を進めて「寧ろ日本の歡心を買ふの優れるに如かず」と考ふる
に至れり。是れ英國の輿論は、平壤、黃海、旅順の大勝後、俄然一變

の徴候を發現したる所以なり。又是れ現内閣が連合仲裁を發議
したるの一事、頗る世上の攻撃を被るに至れる所以なり。
今の在野黨則ち保守黨の機關紙は、概ね筆鋒を揃へて、連合仲裁
の發議を非難し、中立不偏なるタイムス報の如きも亦大に之を
攻撃す。僅に數月以前までは、支那を揚げ日本を抑ゆるを以て、其
職分の如く心得たる諸新聞か、却て首相の賣恩政略に反對する
に至れるは、風潮劇變の徴候に非ずして何をや。
加之ならず、前きに海軍長官の一人たりしハートレット氏の如
きは、書をポースト新聞に寄せて、日本は東洋に於ける英國自然
の同盟國たるを説き、又日本と永く友誼盟好を結ぶの必要を説
けり。前の外務次官カルゾン氏の如きも、亦一書を著はして、支那
の羸弱にして結托するに足らざるを説けり。此他同様の説を爲

英國政界
の一大變
象

すもの既に少なからずして、今後益々將に多からんとするの勢あり。多年清國を稱揚扶掖して、唯た其覺睡蹶起を是れ待てる英國有力の新聞紙及び政治家の、變説せると凡そ此の如し。豈に政界の一大變象と云はざる可けんや。特にタイムズ社説の如きは世人の最も注目すべき所なり。何となれば該報は常に英國の輿論を代表して、而も常に一着の先を制すればなり。

近時俄然として勃興したる此變象、果して勝を制すべき乎。將た變象の消滅は、其勃興の如く急劇なるべき乎。之を今日に豫言するは、太早計に屬す。然れども現内閣依然舊政略を執持するに方り、變象勝を制して輿論一變せは、内閣素より顛覆せざるを得ず。今後英國に現出すべき日本黨支那黨の論争は、夫れ内閣起仆の原因たらん乎。

日本黨支
那黨英國
に現出せ
ん

類似の先
蹤

稍や此變象に類似せる事例は、千八百七十六年乃至七十八年に在り。英か土耳其機に對して賣恩待斃策を取れるは、一朝一夕の故に非ず。此點に於ける英國々論の一致は、支那に對する國論の一致よりも固し。然るに土兵一朝ブルゲリア人民を虐殺して、殘暴酷薄を極むるや、英の政界は俄然一大變象を呈出し、先きに一九一〇年政治社會を勇退せるグラッドストーン氏の如きも、亦憤然蹶起して土廷の暴虐を痛論劇攻せり。是に於て乎非難の聲忽ち全國に沸騰し、土廷の殘暴を坐視せる保守黨内閣は、幾ど其地位を保つ能はざらんとするに至れり。

時に露廷は、機に乗して宿志を貫かんと欲し、獨力以て兵備干涉を行へり。英の首相ベコンスフキールド伯は、露廷の干涉を利用して、此變勢を壓伏するの計を施し、以て忽ち輿論の風潮を轉回

せしむるを得たり。

英人の最も惡み、最も怖るゝ所は、露國にあり。其深く土耳其機と結托するは、之を以て其藩屏と爲さんと欲するに外ならず。故に内閣は露の侵略を大聲疾呼して、土の援けざる可らざる所以を説き、以て英人固有の怖露病に訴へたり。是に於て露の干涉、一步を進むる毎に、英國に於ける土耳其機攻撃の論勢は、一步を退き、露土兵を交ゆるに及んで、政界の變象は、遂に全く消滅せり。

唯た其形を比すれば、今回の變象は、酷た曩時の者に似たり。細かに其精神及び關係を考ふれば、彼此大に異なる所あり。故に對土の變象忽ち消滅したるの故を以て、對清の變象も亦忽ち消滅すべしと云ふは、未だ速了の見たるを免れず。

然りと雖も單に支那の歡心を収むるの點より考ふれば、今日支

支那の歡心を収むるの利益少なし

那を援るの功は、長髮賊の亂に方て之を援けたるの功に倍從す。蓋し清廷か其恩に感ずると、必ず曩時に倍從す可ければなり。獨り如何せん歡心収攬の利益は、曩時の如く著大ならざるを。

支那と結托するも、兵事上の利益極めて少なきは、英人漸く之を悟れり。故に歡心収攬の利益は、唯た貿易上に於て之を見るとを得可し。而して貿易上の利益は、一大危険を冒して、更に支那の歡心を収攬せざるも、英は既に充分に之を享受するを得べき位地に立てり。是れ我國政治家の深く考量せざる可らざる所たり。

一大危険とは何ぞや。我か日本の敵意を買ひ、我をして排英政策を確定せしむるの一事是れなり。

英人若し先見の明あらば、變象必ず輿論と爲て、對清政略を一變すべし。若し先見の明なくんば、久しからずして舉國再び舊愛に

舊政略の一大危険

歸復せん。

深沈重厚(其弊は遲滞)にして容易に動かさるは、英人の特質なり。然れども彼等は、亦天下に先んじて、利害得失を看破するの炯眼を具ふ。而して一たひ之を看破して、其過を悟れば、果斷勇決直ちに其方向を一轉す。是れ亦英人特得の技倆なり。

故に英人は今回の交戦に由て多年の過を悟り、忽ち其東洋政略を一變せんも圖り難し。若し之を一變せば、其新政略は、日支の間、強て輕重を置かさるに在るへし。細言すれば従前は兵事貿易の兩目的を以て支那と結托せしも、將來は兵事上の目的に於ては、日本と結托し、貿易上の目的に於ては、支那と結托せんと欲するに至るへし。而して日支兩國に對する輕重親疎の差別は、時勢の變動に從て常に變動すへし。

余は敢て之を喜ぶものに非ず、又素より英の誘引に應じて、深く之と結托せんと欲するものに非ず。我か帝國には、自ら特種の利害あり、天職あり、政略あり、國是あり。英の我に對する親疎輕重の如きは、素より以て我か國是政略を動かすに足らず。英の我に親近するを喜んで、直ちに日英同盟説を唱ふる者の如きは、卑陋偏淺素より以て識者の一笑に價せず。之を要するに、英の對清政略は、動かんとして未だ動かす、留らんとして必ずしも留らず、今や正に動搖不定の間在り。他國の政略未だ確定せざるの時際は、當さに我の乘して以て我か大策を斷行すへき一。大好機なり。機會一たひ逸すれば、容易に追捕す可らず。當局者請ふ幸に之を深思せよ。

第四節 佛露曼米の情形

佛露の對清政略は、専ら其領域を擴大するに在り。曼米の對清政略は、専ら其商權を伸張するに在り。此目的を貫くの方法に至ては、二者共に未だ一定の成算あるに非ず。唯た變を制し、勢に乗じ、以て其欲を逞ふせんと欲するのみ。故に此諸國は、未だ確定せる對清政略を有せずと云て可なり。況や爾餘歐米列國をや。

佛は、三十四年前に於て、一たひ兵を北京に進めたりと雖も、同盟軍なりしか爲め、其功獨り英國に歸せり。佛は其威武以て清人を壓伏するに足らず、其恩眷以て清人を懷柔するに足らず、空しく兵を損じて別に得る所なかりき。

十年以前に於て、再び開戦し、幾と清人をして天下の勇武なるもの獨り英人に止らざんことを知らしめんとするに至れりと雖も、諒山一敗後俄かに姑息の媾和を爲せるを以て、今に至るも尙ほ

清人の輕侮を免れず。其威武揚らす、其商權振はさるは、特に怪むに足るものなきなり。戦はされは則ち止む。苟も戦へは則ち四百餘州を脅伏せしめさる可らず。然らされは益々清人の驕慢心を助長す。戒鑑遠からず、彼の佛國に在り。

佛は支那に向て領域商權兩つなから之を擴張せんと欲望せざるに非ず。然れども先きに一たひ其威武を汚損せるか故、威迫懷柔共に容易に何れの欲望をも貫達する能はず。

露に至ては、日夜南下を圖て、拮据經營須臾も或は怠るとあるなし。中央亞細亞の大鐵道は、既に支那の西邊に迫り、柴伯里亞鐵道は、將に遠からずして、支那の東境を壓せんとす。加之ならず鐵騎常に滿州蒙古の境上に雲屯し、虎視眈々として罅隙を窺ふ。機會一たひ熟すれば、雷掣電擊以て圖南の宿志を成さんと欲す。是

れ清廷の最も憂ふる所なり。故に二國の情好は、決して英清の如く親密なるを得ず。乃ち貿易上の利益は、露の強て重きを置く所に非ざるなり。

英清相ひ結托して我に遠さかると、依然今日の如くんは、露は勢ひ我に親近せざるを得ず。

露の志す所は、機會を相して鐵馬長驅直ちに清韓を侵すに在り。故に朝鮮に關しては、日露の利害或は衝突す可し、支那に關しては、衝突するの憂少なし。況してや直ちに我か領域を侵すか如きは、露人の曾て夢想せざる所なり。少なくとも近世に及んては、露人全く此の如き野心を杜絶せり。然るに世間或は露を視て、我か宿敵の如く妄想するものあるは何ぞや。

對露の謬想

今ま此謬想の由て起る所を尋ねるに、其淵源素と邦人多くは英

人の手を経て、露の情勢を學ぶに在り。英は露の宿仇なり。故に其記事論説談話等の露に關するもの、一として憎惡のために其實を失はざるはなし。邦人は英人の僻見を生吞して、自ら誤らるゝとを知らず。是れ其病源なり。

露。清。は。當。さ。に。相。ひ。関。く。へ。き。の。理。勢。有。て、日。露。は。當。さ。に。相。ひ。親。む。へ。き。の。理。勢。あり。此理勢を知らずして、東洋の時事を談するは、猶ほ盲夫にして色を評するか如し。其誤らざるは蓋し僥倖のみ。

世間或は千八百六十年の役、露か清と英佛との間に調停して、黒龍江邊巨大の地を割かしめたるを非難するものあり。然れども今の吞噬世界に在ては、是れ尋常一樣の手段たるに過ぎず。故に直接に和を請はずして、露の處中調停を求めたる請廷の愚蒙を笑ふは可なり、露の邪慾を咎むるは非なり。

蒙清廷の愚

曼米の如きは、其支那に求むる所唯た貿易産業の利を得るに在り。故に其所謂る對清政略なるものは、純然たる商業政略にして幾ど方今の事時に關係するものなし。

他日形勢一轉せば、曼或は佛露に倣ふて、領土を支那に得んとを熱望するに至るへし。北米聯邦の如きは、徹頭徹尾貿易産業の利益を以て満足せん。曼米の政略は、今ま之を細論せずして可なり。

第五節 列國利害の衝突

北米聯邦は、海を隔て、遠く西半球に居るか故、別に利害の衝突なしと雖も、他の英佛露曼に至ては、國を地域狭小なる歐洲に建て、其領域相ひ錯接するを以て、彼此交も利害の衝突あるを免れず。

(一)佛曼(二)英露(三)曼露(四)英佛(五)英曼、是れ列國憎惡表の順序に非

すや。此四國は相互の間に於ては、何れの邦國に對するも、一として利害の衝突を見ざるはなし。獨り佛露の關係に至ては、稍や親善なりと雖も、尙ほ其利害を同ふするに非ず。

列國の衝突

此四國は、政路上、貿易上、歴史上等の關係を以て、啻た歐洲に於て相ひ衝突するのみならず、亞細亞に於ても亦相ひ衝突す。中央亞細亞に於ける露の南下東侵は、英國既得及び將得の利益を害し、南亞に於ける佛の領域擴張は、英領印度を危ふす。英の領域擴張も、亦逆しまに佛露の憂患たり。曼か百方計を運らして、商權を支那に伸さんとするは、英の大に憂ふる所にして、英の跋扈は亦曼の憂ふる所なり。獨り佛露に至ては、歐洲に於て親善なると同しく亞細亞に於ても亦未だ利害の衝突を見ず。蓋し佛は極南に據り、露は極北に據り、山河隔絶して、互に聲息を通せざるか

爲めなり。

列國互に利害を異にすると、凡そ此の如し。故に何れの邦國たるに關せず、獨り政權商權を亞細亞に擴張せんとすれば、必ず爾他列國の媚嫉反抗を招く。是れ英相が獨力干涉を憚て、豫め他の列國に謀れる所以なり。又是れ爾他列國が支那獨り英を徳とし、英獨り其權勢徳望を伸増せんことを恐れて、俄かに之に同意せざりし所以なり。

對清政略に於て、歐洲列國の分裂抗争するは、自然の理勢なり。之を聯結して、共同仲裁若くは干涉を行はんとするは、自然の理勢に背く者なり。理勢に従ふものは功を成し易く、之に背くものは功を成し難し。故に我が當局者にして、進んで積極的大錯誤に陥らざる以上は、ヘコンスフィールド伯再生すと雖も、到底列國を聯

列國聯合
の計畫は
破り易し

結する能はず。況してや我れ苟も多少の外交術を知らば、列國聯合の計畫を未萌に防禦するか如きは、蓋し容易の業なるのみ。英相をして共同干涉の議を起さしめたるか如きは、既に以て我が外交家の恥辱と爲すに足れり。此の如き發議を未萌に豫防するは外交家の職責なることを知らざる可らず。

町田幾堂曰く、我れ一たび清國を屈打す、列國の東洋政略自ら一變せざるへからず、英人動もすれば印度、支那、アフガニスタン三國同盟を作りて、露の南下に備へ、佛の西北侵略を防ぐべきを説く、然れども今より以後英國は我國に親疏するの利害を講ずるの後にあらざれば、其所謂東洋政略を一定するを得ず、英若し清に結まば、露必ず來りて我れに親しまん、是れ勢の必然著者の言の如し、然れども露の對清策は我が對清策と衝突するの憂少なしと云ふに至りては、余未だ其可なるを知らず、由來露の朝鮮を志す、蓋し清國の遽かに侵し易からざりしを以てなり、露若し始めより清國の與し易き今日の如きを知ら

は、豈朝鮮の北部に一不氷結港を得るを以て甘せんや、必ず急轉直下勃海灣に出
つるの策を取らん、

何れの國を問はず、寸尺の地と雖とも之を清國に奪はんとするものは、皆我が
對清策と相容れず、故に之を露國よりして論すれば、清の弱は其の喜ぶ所なり
と雖も、我國の強は則ち其憂ふる所る、日露の利害相同しからざるは、猶日英
の利害の相同しからざるか如し、

是故に我國防の大方鍼は、海に於ては英を屈し、陸に於ては露を壓するの武力
あるを要す、來る拒まず、去る逐はず、親疏他の爲すに任かす、此の如くして
始めて東洋の盟主たることを得ん、

第四章 帝國の對清政略

回顧すれば、既に十星霜を隔つ。明治十七年の夏、余始て清國に遊
ひ、熟ら其形勢を觀察して、茫然自失したり。蓋し事實の支那は、

曾て書史に因て見聞せる者と、全く其形勢を異にするはなり。

余をして毫も漢籍を讀まざらしめは、事實の支那を見て驚愕す
ること、決して此の如く深からざるへし。余は不幸にして多少の
漢籍を讀み、之に由て聊か書上の支那を知れり。然るに書上の支
那は、實際の支那に非ず。二者全く其性質を異にすることを發見
せり。悉く書を信せば書なきに如かず。孟軻の言、實に我を欺かさ
るなり。

漢籍を讀むこと益々多ければ、支那の實況に遠さかること益々
遠し。余は多少書上の支那を知れるか故、實際の支那を見て大に
驚けり。綱紀の頽廢、道德の朽腐、既に其極度に達し、書中論記す
るか如き事項は、一も實際に行はるゝ者なきに驚けり。

當時支那及び其民族の運命に關する一大疑惑は、端なく余か腦

書上の支
那は實際
の支那に
非ず

十年以前の
斷言

中に湧き、日夜之を思ふて其解釋を求めたり。講究數月を経て、余は漸く支那帝國の必亡を信じ、其民族の流離四散を信するに至れり。

是に於て余は大膽にも論斷せり。曰く「支那は遠からずして滅亡す可し。其人民は侵略者の爲めに逐はれて流離四散し、第二のシウ人と爲るへし」と。

爾後既に十年を経たりと雖も、支那帝國は尙ほ未だ滅亡せざるなり。乃ち未だ滅亡せすと雖も、前十年間に於ける多少の觀察と多少の講究とは、余をして益々必亡の豫言を信せしむるに至れり。然れども流離四散の一段に至ては、少しく之を改むるの必要を悟れり。何となれば支那民族の流離四散すると否とは、併領者の仁不仁に因て定まるべき問題なればなり。假令ば我が帝國を

して之を併領せしめん乎。我は必ず極力之を緩撫すへし。豈に流離四散以て第二のシウ人たることを許さんや。

支那は一も獨立の要素を完具せずして、滅亡の理勢備さじ具はれり。然り而して尙ほ餘喘を存する所以は何ぞや。列國皆な支那の眞勢を知らざるか爲め、百方保存の道を講ずるに因れり。支那は東西諸強國の誤解に因て生存する者なり。誤解氷釋すれば必ず滅亡す。

列國の誤
解は支那
存立の大
原因

今や日本帝國は、天下に率先して、誤謬を悟れり。歐米列國も、亦漸く之を悟らんとするに至れり。列國皆な之を悟れば、世間復た強て老朽垂死の支那帝國を扶持して、殘虐横暴を逞ふせしむる者なきに至るや必せり。列國の誤解と救護とに因て、僅かに餘命を保てる清國は、此に至て勢ひ滅亡せざるを得ず。此故に余は十

年以前の論斷を再言せん。曰く「支那は遠からずして必ず滅亡すへし」と。其人民を流離四散せしむると否とは、攻滅者の政略如何に在り。

清國前途の形勢定に此の如くならば、我の之に對する、如何せば則ち可なる。

第一節 日支同盟

編者或は云ふ「清朝は亡ふへく、清國は亡ふへし。支那は容易に亡ひざるへし。清朝滅亡すれば、英雄豪傑の、必ず愛親覺羅氏に代て、四百餘州に號令する者あらん。我れ宜しく之と結托同盟し、共に與に東亞全局の形勢を維持すへし」と。

文字、人種、風俗、習慣、宗教、粗ほ相ひ同じくして、且つ古來久しく交通往來せるの點より考ふれば、親疎遠近素より歐米諸國と

同日の談に非ず。故に日支同盟論の、既往に大勢力を有し、將來亦尙ほ多少の勢力を有すへきは、敢て怪むに足らず。

特に歐米崇拜熱熾盛なるの今日に於て、パーマー・ストーンの對清政畧、ビスマークの對澳政策を踏襲せんと欲する者あるは、當然の理勢なり。

普墺の關係は、啻に同文同俗同人種の點に於て、大に日支の關係に類似するのみならず、勝者は小國にして、敗者は大國なるの點に於ても、亦稍や似たる所あり。特に爾餘列國皆な大者衆者の必勝を豫言して、自ら其不明を證明したるの點に至ては、彼此幾ど符節を合するか如し。故に今日ビスマークの故智を學んで、戰勝後日支を連衡して、同盟の約を結はんと欲する者あるは、毫も怪むに足らず。

日清の關
係は酷た
普墺の關
係に肖た
り

其形難き
か如くし
て其實難
からざる
の政略

加之ならず、充分之を膺懲せるの後、俄然方針を一轉して、敵國と結托するは、轉接の妙、實に世俗の耳目を驚破するに足る者あり。而して此事や局外者の想像するか如く困難なるに非ず。之を個人間の事迹に驗するに、激論したるか爲めに忘形の交を結ぶ者あり、争鬪したるか爲めに刎頸の親を締するものあり。國際の事亦然らざるの理なし。故に曰く「大に清國を繫破膺懲するの後、俄然方向を轉して、之と結托同盟するは、世俗の想像するか如き難事に非ず」と。

世俗は認めて以て大難事と爲すも、事實に於ては、差したる難事に非るの政略は、名聞家小野心家の最も好望する所なり。日支同盟論は、戦勝後の善後策として、必ず多少の勢力を占めん哉。然り、必ず多少の勢力を占むへし。然れども寔に東亞の長計を慮

必亡國と
結托する
の患害

る者は、更に一步を進めて、支那民族は其の獨立を保全するの智識氣力性情あるや否やを審察斷定せざる可らず。而して余は既に「支那の滅亡は當然必至の理勢なり」と斷言したり。其運命必亡に在るの邦國と結托するは、猶ほ瀕死の病夫を戰場に伴ふか如し。寧ろ我が大害と爲るも、決して利益とは爲らず。

今や清國の滅亡を説く者漸く多し。然れども我が對清政策を定めんと欲せば、常に形勢を揣摩して、其存亡を考定するを以て足れりとせず。更に一步を進めて、滅亡の順序方法を考査せざる可らず。

亡因若し外寇に在らば、之に應ずるの政策なかる可らず。

亡因若し内亂に在らば、更に之に應ずるの政策なかる可らず。

豪傑内より起て、愛親覺羅氏を攻滅し、四百餘州を一統して、新た

に國を建ん乎。其當否は暫く措き、尙ほ日支同盟論を容るゝの餘地あり。

之に反して、強敵外より來て、併領若くは分割せん乎。日支同盟論は、全く消滅せざるを得ず。蓋し支那は全然消滅して、英と爲り、佛と爲り、露となり、若くは英佛露普の分有体と爲るへければなり。既に支那なし、焉んぞ日支同盟あるを得んや。他國の屬領と結託同盟するか如きは、素より獨立帝國の爲すへき所に非ず、又爲し得可らざるの業たり。

故に日支同盟説を實施し得へきは、唯た左の時際に限る。他の狀勢の下に於ては、其利害得失に關せず、到底之を實施する能はざるなり。

(一) 愛親覺羅氏尙ほ四百餘州に君臨する時。

(二) 他姓代て支那の大半を一統し、新に獨立國を開創せる時。

(三) 英雄四方に割據し、支那を數分して、各々純然たる獨立國を爲し、其治安を保維する時。

其利害得失は措て論せず、兎に角日支同盟説を實施し得へきは、唯た右三種の時際あるのみ。而して愛親覺羅氏の命數は、既に且夕に迫れり。且つ支那民族は今の爭奪世界に處して、其獨立を保全するに必要なる要素に於て、一も完具する所なし。故に單に此點より論するも、右三種の時際は悉く假定の空想に過ぎず。

加之ならず、交通機關捷速を極むるの今日に在ては、五洲萬國皆な比隣の如く、其利害互に交錯密接す。故に大亂内より起れば、外寇必ず之に乗し、大寇外より到れば、内亂必ず之に乗す。支那人をとして假令多少の獨立力あらしむるも、決して自力のみに因て、二

四百餘州
無政府と
爲れば外
寇必ず之
に乗す

項三項の場合を事實に現出する能はさるなり。

高才逸足の士をして局に當らしむるも、二項三項の事を行ふには、少なくとも數年、長きは則ち數十年を費さるを得ず。此間の大擾亂は、東西諸強國の決して袖手傍看する能はさる所なり。列國は必ず民命財産保護の名を以て、兵を支那に出し、機會を相して其土地を占領併畧す可し。

故に清朝滅亡するの日は、則ち内亂外寇交も之に乗し、四百餘州全く無政府と爲るの時なり。此際に處して、最も地歩を占め、民心を收攬する者は、支那民族の中に在らすして、必ず他の諸強國に在らん。支那一たひ大擾亂に陥れば、四百餘州の要地は、決して復た支那民族の有に非ず。

果して然らば、日支同盟説は、三種の時際に於て、之を實施し得へしと云ふと雖も、皆な是れ假設の空想にして、決して實際に發現すへき形勢に非ず。故に日支同盟説は、到底實施の機會に遭遇するを得ず。

此事實と理勢とを知らず、徒らに日支同盟を説て、ビスマルクを摸倣せんと欲するは、所謂醜婦にして西施の鬢に倣ふ者なり。日支今日の關係を以て、普墺當年の關係に比すれば、相ひ類似する者太た多し。故にビスマルクの對墺政策を移し來て、直ちに之を我が對清政策と爲さんと欲する者あるは、毫も怪むに足らず。然れども因て以て攻守同盟の利害得失を斷定すべき主眼は、文字風俗人種習慣等の異同に在らすして、攻守力の有無強弱如何に在り。墺は大に普のために破られたりと雖も、其民尚ほ保安持國の要素に富み、其攻守力は以て歐洲五強國に列するに足れり。

攻守力なき者とは
亦
ふ可

普の之と結托同盟したるは、主として其攻守力に取る所あるか爲めなり。

今夫れ支那の攻守力なきは、世人備さに實驗せる所の如し。然るに他の細目に於て、普墺の關係に似たる所多きか爲め、直ちにビ翁當年の故智を學んで、日支同盟を主張す。知らず攻守力なきの支那と結托同盟して、何を爲さんと欲する乎。況や日支同盟は、其利害得失に關せず、到底之を實施すへきの場合なきをや。

第二節 共同扶翼

之を自然の成行きに放任すれば、支那民族は、到底其獨立を保全する能はずして、諸強國のために併領若くは分割せらる可し。故に日支同盟は言ふべくして、行ふ可らざるの空論たり。

自ら其獨立を保全する能はざるの民族と雖も、他より之を扶助救

護すれば、以て一時滅亡を免れしむるを得可し。

支那は他の扶翼に因て、存立するを得へき邦國なるや否や。

扶翼に因て存立するを得へしとせば、扶翼の程度方法果して如何。

扶翼に二法あり、獨力扶翼及び共同扶翼是れなり。

東洋の治安を保維し、永く地理的人種的争鬭を避けんと欲せば、東洋の天地は東洋人をして之を保全せしむるを要す。歐洲諸強國と共同して支那を扶翼するは、事或は便易なるか如しと雖も、其實決して然るに非ず。彼の地理的、人種的、宗教的、風俗的觀念の奴隸とも云ふへき歐洲諸國は、恐くは公正不偏の位地に立つと能はざるへし。此に立て我と協同一致し、以て支那のために支那を扶翼する能はざるへし。

口を扶翼に籍て、各々私利を經營するは、歐人得意の技倆なり。英佛の埃及に對するか如きは、其明證に非ずや。

歐洲諸國は、扶翼政策に於て、互に協同一致する能はず。好し互に一致するも、恐くは公正無私の位地に立て、人種感情風俗習慣を異にする所の我か帝國と協同一致する能はず。東亞の主宰者たるへき日本帝國と協同一致する能はざるか如き邦國と提携して、扶翼の實を擧るは、泰山を挾んで北海を越ゆるよりも難し。

好し、爲すを得へきの業なりとするも、思想感情人種全く相ひ異なるの邦國と與に支那を扶翼するは、大衝突大争亂の種子を養成する所以なり。見よ其人種性情利害相ひ類似すると、英佛の如きを以てするも、尙ほ圓滑に共同扶翼の實を埃及に擧る能はざるに非ずや。

共同扶翼の困難

共同扶翼は大衝突の原因

故に東亞の長計上、支那を扶翼するを得策とせば、我か獨力を以て、之を爲さざる可らず。歐洲諸國を誘ひ來て、軋轢衝突の端緒を發くは非なり。

第三節 獨力扶翼

支那の二大憂患

支那の最大憂患は、外交其道を得ざると、軍備未だ整はざるとに在り。而して支那人か自ら此二大憂患を除く能はざるは、既往の事迹に照して、之を證明するを得へし。我か力を假して此二大憂患を掃蕩せば、支那則ち半獨立の姿勢を存するを得へく、然らずんば則ち必ず滅亡すへし。而して此二憂を掃蕩せんと欲せば、支那をして軍事外交の主宰權を我に委托せしめ、且つ之を施行するに必要なる金額を釀納せしめざる可からず。獨力扶翼の道唯た是れあるのみ。

獨力扶翼の方法

軍事外交財政(軍事外交の維持に必要な)の三權我に歸すれば、我れ必ず支那の爲めに、滅亡の主因を掃攘するを得へしと雖も、苟も然らざる以上は、假令何等の術數を以てするも、到底其滅亡を救止する能はず。

然れども三權我に歸すれば、支那は純然たる獨立國に非ず。其關係恰も日耳曼諸小國の、普國に對するか如くなるに至るへし。

此の如くして、我れ始て東洋の盟主と爲り、其霸權を掌握し、扶翼の實効を擧るを得へし。三權を我に收めずして、盟主と云ひ、霸權と云ひ、扶翼と云ふも、皆な書生の空言たるに過ぎず。

余は素より支那の滅亡を希圖する者に非ず。望む所は支那自ら其獨立を保全して、共に與に東洋大局の形勢を維持するに在り。好し扶翼を必要とするも、軍事外交財政の三權を我に收めず、是

より以下の程度に於て、其實効を擧るとを得ば、之を爲さんと欲する者なり。然れども熟ら支那の形勢を考察するに、是より以下の程度に於ては、決して扶翼の功を奏する能はず。

故に余は軍事外交財政の三權を我に收むるを以て、最底度の干涉、最寛大の扶翼法となす。知らず支那人は之に満足す可きや否や。

余は必ずしも支那人之に満足せざるへしと云はず。彼輩の無耻無氣力なる、或は之に満足すへしと雖も、彼輩の満足は、東洋の大計上より來る所の満足に非ずして、只た無耻無氣力より來る所の満足なり。喜ふへき満足に非ずして、寧ろ憫むへき満足なり。

好し何種の満足にもせよ、支那人苟も之に満足すれば尙ほ可なり。彼れ若し之に満足せず、愚にして寧ろ滅亡を擇むか如きとあり。

獨力扶翼
說の實行
し難き所
以

らは、扶翼保存は可言不可行の空言と爲る。

支那人の蒙昧頑愚なるや、德に服せずして却て怨を蓄へ、強ければ則ち復讐を思ひ、弱ければ則ち滅亡を擇まんも。亦未だ知る可らず。苟も此の如くんは、到底獨力扶翼の實を擧る能はず。而して共同扶翼は寧ろ之を爲さざるの優れるに如かず。

扶翼政策を實施するに方では、未だ必しも愛親覺羅氏をして四百餘州に君臨せしむるを要せず。或は朱明の後を立るも可なり。或は境土を數分して、一大聯邦を建設するも可なり。其法素より一にして足らずと雖も、要するに皆な坐上の空談たるを免れず。

第四節 共同分割

扶翼保存は、強て老朽瀕死の支那帝國に醫藥を進むる所以なり。經世の要務豈に唯た此の如く因循姑息なる者のみならんや。乃

ち一刀兩斷の快策有て、識者の採擇を待つ。共同分割、獨力併領の二策是れなり。

日英佛露の四國は、皆な領土を亞細亞に有し、支那の治亂興亡に對して利害の關係を有す。接隣の火災は、其袖手傍看し得へき所に非ず。乃ち支那衰亡の日に方では、其境土を分領し、其民衆を塗炭の中に拯て、其安寧幸福を維持せんと欲するもの、則ち是れ說者の所謂共同分割策なり。

日本は支那の東部を領し、英は西部、露は北部、佛は南部を領して、其居民を保護せば、亦以て一時大亂の慘禍を免れしむるを得へし。

然れども余か共同扶翼に反對せるの理由は、共同分割に反對するに至て益々重し。歐人をして東亞を蹂躪せしむるは、其治安を

共同分割
は東亞の
平和を永
遠に維持
する所以
に非ず

永。遠。に。保。持。す。る。所。以。に。非。さ。る。な。り。

且つや我れ正に反正拯物の洪圖を懷て、清國を膺懲するに方ては、歐米列國は之に容喙するの權利なし。況んや兵を放て分割奪掠の事を行ふに於てをや。一たひ之を許さば東洋の大計長へに去らん。

然りと雖も、扶翼の計既に行ふ可からず、我か獨力亦以て東洋の治安を保維するに足らすんは、共同分割も亦止むを得ざるの窮策なり。之を自然に放任して、四億の生靈を塗炭の中に陥らしむるに比すれば、尙ほ志士仁人の義舉たるを失はず。日本帝國は獨力を以て東洋の治安を保維するに足らざるや否や。

第五節 獨力併領

獨力を以て東洋の治安を保全し、福利を宇内萬國に及ぼさんと

支那民族
は從順に
易して御し

欲せば、先づ四百餘州を擧て、我か主權の下に置かざる可からず。之を爲すの難易は、事自ら別題に屬するか故、余は唯た爰に明言すへし「是れ決して不能行の業に非ず」と。支那民族は古來暴政虐治の下に生長し、數々胡兒賤夫の駕御を被れり。故に其習性從順にして御し易し。之に臨むに我か廉潔正大なる政道を以てせば、必ず支那民族をして古今無双の治安及び幸福を享受せしむるを得へし。又何ぞ歐洲列國の助力を求むるを要せん。

加之ならず、支那人の性情は歐人の知悉し難き所なり。之を知らざるの歐人をして、支那を治めしむると、之を知ると最も深き日本人を治むるとは、其利害得失難易素より霄壤の差なきを得ず。

印度を治むるの困難は、英人未だ印度人の性情を知らず、其利害

感情全く相ひ異なるに因る。

歐洲諸強國の目的、唯た蠶食狼吞に在らば、余復た何をか云はん。苟も多少の公義心を存し、多少人類の福利を思ふ者は、必ず共同分割に左祖せずして、獨力併領を賛成すべし。蓋し是れ四億の生靈をして其安全幸福を得せしむべき最好方便なればなり。

英の慈善家常に云ふ「吾人は印度三億の民を棄て、再び虐政内亂の慘禍を被らしむるに忍ひす」と。然り、印度人の幸福は、英國の併畧に由て大に増進したるを疑はず。

然れども之を、日本の統御を受るか爲めに、支那人の幸福の更に大に増進すべきに比すれば、素より同日の談に非ず。余は實に支那人を棄るに忍ひす。故に帝國をして、天に代て、其地を領し、其民を治め、文明の光輝を四百餘州に横被せしめんと欲するのみ。

併領説は民を棄るに忍ひざるか爲めに起る

我れ支那を併領して、其主權を掌握せば、大に我か官吏を移して、内治外交の要局に當らしむるを要す。乃ち軍制を改革して、節制訓練の頽弛を矯正し、官規を振肅して、吏僚の横暴侵掠を嚴禁し、財政を整理して、正税以外の徴課を禁遏するか如きは、革新改良の第一着手ならざる可らず。綱紀振肅して、軍制確立せば、以て内外の治安を維持し、境土生民を保全するに足れり。支那人をして自ら之を爲さしめんと欲するは、百年河清を待つと一般、決して其目的を貫く能はずと雖も、我か帝國臣民をして其局に當らしめば、二十年を出てすして全く其面目を一變するを得可し。是れ支那民族の幸福には非らざる乎、人類の慶事には非ざる乎。

加之ならず、我の支那を併領するは私利私慾の爲めに非ず。故に

我が教化に由て、其民獨立力を生ずるに至れば、之を獨立せしめて可なり。強て鐵鎖を以て之を繫束するの意なきなり。是れ世界に向て千古無双の美例を布く所以には非ざる乎。

第六節 賣恩待斃

更に一種の法策あり、老朽垂死の殘暴國と雖も、苟も存する間は、之に向て百方恩を賣り、其既に斃るゝや、直ちに一攫併呑の邪慾を逞ふする是れなり。則ち英の土耳其機政策は其一例なり。英國は、支那に對しても、亦久しく此政策を執れり。千八百六十年の役、北京を攻陥すと雖も、尙ほ力めて其要求を寡少にし、剩へゴルドン將軍を貸して、長髮賊を伐たしめたるか如きは其明證なり。

國家の目的をして、單に領土擴大と、私利増殖とに在らしめば、此策亦可ならざるに非らずと雖も、如何せん我が帝國の目的は、此の如く陋劣ならざるなり。

好し百歩を讓て、我が目的亦此に在りと假定せよ。同一の清國に對して、他人の故轍を進むは、首功を收むる所以に非らず。故に余は道義と得失の二點に於ては斷して此説に反對す。

第七節 選擇

以上六策の利害得失、及ひ可行、不可行は、余既に各節の下に畧言せり。若し支那に獨立力あり、且つ東洋の大計を見るの明あらば、日清同盟策亦可ならざるに非らずと雖も、支那は二者併せて之を缺く。故に日清同盟は遂に痴人説夢の類たるを免れず。

共同分割の非なるは、共同扶翼の非なるよりも甚たし。二者共に歐洲勢力の東侵を促かす所以にして、決して東洋全局の大勢を

賣恩待斃
策の不可
なる所以

維持する所以に非ず。

賣恩待斃は、策奇ならざるに非すと雖も、英國既に之を行へり。他人の故轍を進む者は、必ず人後に落つ。果して然らば、我の當さに取る可き者、唯た獨力扶翼と獨力併領の二あるのみ。獨力扶翼素より好しと雖も、彼れ之を諾せされは、我れ之を行ふ能はず。好し、彼れ之を諾して、我れ之を行ふも、革新改良の功、素より獨力併領の如く迅速偉大なる能はず。故に寔に支那を革新改良して、東亞の長計を建設せんと欲せば、我か對清政畧は、唯た獨力併領の一あるのみ。

獨力併領
は我か唯
一の對清
政畧

幾堂曰く余も亦著者か所謂日清同盟説なるものを唱ふる一人なり、

滿清政府の威信全く地に墜つ、久しからずして必ず亡びん、若し亡びずして政紀再ひ張るの日あらは、清は必ず我を以て不俱戴天の深仇となさん、亡びされ

は亡ぼさるへからず、

是故に余の所謂日清同盟は、必ず他姓代りて新たに國を創設するもの待つあり、而して我軍支那本土に侵入して、清民皆滿朝の頼むに足らざる日は、則ち革命の暴發あるの秋なり、我れ革命を煽動し、革命者を扶助して、其の濟民の志を遂げしむ、是に於て乎日清同盟始めて固し、

然れども四百余州一人の豪傑なくんは、同盟論遂に其効を奏するを得ず、故に我國民は豫しめ清國併領の大決心あるを要す、同盟説併領説此二者を措きて、他に東洋永遠の平和を維持するの長計大策あらざればなり、

著者對清策を六種と爲す、余更らに一を加へて七種となさん、局外中立策是れなり、清國今後恐るゝに足らず、只憂ふべきは列國の之を侵略するに在り、故に列國約するに清國を侵さず、之を侵すものあるときは、聯合して其罪を責むべきを以てすへし、此策固より永く東洋の平和を維持するに足らずと雖も、寧ろ共同分割策に優る、宜しく對清策の一に數ふへし、

第五章 北京城下の盟約

帝國は戰の爲めに戰ふに非ず。東洋全局の形勢を維持せんか爲めに戰ふなり。而して其法唯た歐洲勢力の東侵と、支那の再起復讎とを杜絶するに在り

第一章
參看

故に因て以て此目的を貫くに足るべき媾和は、何時之を爲すも可なり。然れども退て日支兩國の形勢を熟察すれば、我が兵北京に入るの後と雖も、尙ほ此目的に協ふの媾和を爲す能はさらんを恐る。況や未だ此に入らざるの以前に於てをや。余か故らに北京城下の盟約と云ふ所以は他なし。媾和談判は少くとも北京攻畧後に於て之を開くに非ずんば、到底此目的を貫く能はざることを確信するか爲めのみ。

媾和談判
は必ず北
京攻落を
待たざる
可らす

余は素より清廷の落膽沮喪以て和を請ふことを喜ぶものに非ず。何となれば支那の運命は必亡に在るとを知ればなり。必亡の清廷と媾和するは、他年再び東洋の波浪を洶湧せしむる所以なり。然れども彼れ禮を卑ふして和を請ふに方て、故なく之を拒絶するは、國際の禮に非ず。故に彼れ之を請へば、余は之に應ずるの適當なるを認む。然れども我の之に應ずるは、北京占領以後ならざる可らす。

第一節 北京占領の必要

其理由凡そ六あり。

(一) 敵國の都城に入らずして退くは、軍隊の耻る所なり。故に我が軍隊をして其面目を全ふせしめんと欲せば、必ずや一たび北京を占領せざる可らす。

北京占領
の止む可
らざる所
以

(二)清人をして徧ねく我威武に慴伏せしめされは、一たひ和平を克復するも、他日彼れ必ず固有の驕慢心を再發して、悍然敵意を逞ふるに至る。而して我か威武を揚るの道は、其首都を攻畧するより善きはなし。

(三)支那人の變詐詭譎は、天下に冠絶す。故に先づ其咽喉を扼して、而後ち媾和談判に着手するに非ずんば、彼れ必ず特得の長技を逞ふし、曠日彌久詭變百出、遂に其要領を得る能はず。

(四)充分に之を膺懲するに非ずんば、假令如何なる盟約を結ぶも、清人決して之を守らず。而して北京占領は精神的膺懲の一大手段なり。

(五)支那二千年間の歴史は、首都陥れば國從て亡ふるとを證明す。故に支那人を膺懲するか爲めには、北京占領の特地に必要なるを見る。

(六)豊公征韓の一擧は、今に至るも尙ほ邦人を奮起作興せしむ。其感化力の偉大なるは、萬卷の經典と匹敵す。我か兵一たひ北京を占領せば、千秋の後と雖も、尙ほ惰夫をして奮起せしむるに足れり。

假令中道にして止戦の必要に遇ふも、北京は尙ほ必ず之を占領せざる可らず。清廷若し其以前に於て禮を卑ふして和を請はく、休戦條件の一として北京を明け渡さしめ、兵を進めて之を占領せざる可らず。他所に於ては百戰百勝すと雖も、北京に入らざれば、以て支那人の頑瞑を覺破するに足らざるなり。見よ長髮賊の如きは、支那の大半を侵畧したるも、未だ北京に入らざりしか爲め、清廷尙ほ之を視て鼠賊草竊と爲せるに非ずや。清廷唯た鼠賊

兵を敵國の首都に進むるは常例なり

草竊の觀を爲せり。故に長髮賊の勢焰正に天に冲するに方て、更に釁を英佛と開けり。

皇師一たひ北京に入るに非すんは、海陸の連戰連勝は、未だ以て支那の官民を膺懲し、其頑暝を攪破するに足らざるなり。

戰勝後、兵を敵國の首都に進むるは、昔に支那に對してのみ必要なるに非ず。故に英佛同盟軍は、強て北京に入り、ビスマークは休戰條件として巴里城を明け渡さしめ、衝突の危険を冒して、普軍を佛京に進ましめたり。露土戰爭に方ては、英政府開戰を以て露軍の侵入を防げるか故、露は止むを得ず土京に入らざりしと雖も、尙ほ兵を其近郊に觀閲し、一は以て威武を示し、一は以て軍隊の不滿を慰撫したり。

彼の兵を北京に進むるを不必要と爲す者の如きは、未だ軍隊の

意氣、國際の常道、支那の特質を知らざる者のみ。

第二節 降字の誤解

今の對清政畧を説く者、動もすれば則ち云ふ「必ずや降服せしめん、決して媾和す可らず」と。借問す降服と媾和の別果して如何。支那由來漠然たる文字に富む。此降服なる文字も、亦漠然たる者の一なり。其定義明かに知り難しと雖も、之を古來の用法に考ふるに、人に在ては服従を意味し、國に在ては主權の讓移を意味するに似たり。秦王子嬰か「素車白馬、繫頸以組、出降軹道旁」と云ふか如き則ち是れなり。秦國の主權は、之か爲め他人の手に移り、其國家は之か爲め滅亡したり。

方今の世に於ては、單に執權者の一意を以て、主權を他國に讓移する能はず。故に歐米諸國には「將士城壘の降服」ありと雖も「國

降服は主權の讓移なり

家の降服」なる者なし。那翁三世は降れりと雖佛國は降らざるなり。巴里城は降れりと雖も、佛國は降らざるなり。

國家の降服は、主權の讓移なりとせば、降服は則ち滅亡なり。敗國の降服は、勝國の併畧と其名を異にして其實を同ふす。故に清廷の降服は、則ち清國の滅亡なり。蓋し支那に在ては、古來「朝廷則ち是れ國家」なればなり。

世の清廷をして必ず降を乞はしめんと欲する者、若し滅亡の意義にて降字を用ひは、余は之に左祖すと雖、其字義を定めず、漠然之を用ゆるに至ては、余素より之を不可とぞ。蓋し降服の佳名の下に、姑息の平和を隱蔽することを得へければなり。

清廷にして苟も其主權を保持する以上は、其言辭如何に謙遜なるも、其條件如何に充分なるも、是れ請和のみ、決して乞降には

非ざるなり。

其主權を讓移し、唯た命是れ從ふに非ずんば、之を稱して「清國の降服」と云ふを得ず。一城一將の降服は之を得ること太た易し。一國の降服は之を得ると極めて難し。世人若し此理を知て、之を主張せば、國家の大慶實に之に過くるはなし。

徒らに空名を得て、世上に誇揚するは、支那人古來の弊習なり。我が帝國臣民たる者、若し降服の佳名に滿悦して、其實を收めず。却て姑息の媾和に雀躍するか如きことあらば、支那人の弊習を學んで、却て之に過るものと云ふへし。

世の降服を説く者、請ふ國の降服は、則ち滅亡なることを知れ。又主權の讓移なることを知れ。又勝者より云へば、併呑たり領畧たることを知れ。但し彼れ既に降るの後ち、其主權の一部若くは全部

降服の名
を以て媾
和の實を
蔽ふ勿れ

を恩惠的に還與するは、私の政畧に屬す。彼れに在ては、素より其
主權を擲棄せざる可からず。
此事實を備へざるの降服は、降服に非ずして媾和なり。徒らに降
服の名に眩惑して媾和の實を主張するか如きは、識者の取らざ
る所なり。

第三節 媾和條件

姑息の媾和は、深憂長患を他日に遺す所以なり。又軍隊の威武を
汚す所以なり。素より出師の大目的を貫徹する所以に非ず。
北京占領以前の媾和は、我れ當るに之を拒絶すべきの理あり。宇
内列國皆な此理に反抗する能はずと雖も、彼れ禮を備へて和を
請ひ、休戦の一要件として北京を明け渡す時は、我れ一たひ之に
應じて、彼れの請ふ所を聞き、若くは我か命令を傳へざる可らず。

東洋將來
の二大亂
源

盛京の必
要

彼れ唯た命是れ從はんと欲するも、尙ほ之を聽かざるは、宇内列
國と天下後世とを心服せしむる所以に非ず。
出師の目的唯た支那の再起復讐を防ぐに在らば、之を貫くと難
きに非ず。彼か死命を制するに足るべき要地を南北及び中央に
得れば可なり。然れども出師の目的は唯た此に止らすして、實に
東洋の平和を永遠に克復するに在り。故に支那の再起復讐(一)を
防くと同時に、亦他の亂源を杜絶せざる可からず。而して歐洲列
國の東侵(二)は他の最大亂源なり。
如何せば、以て東洋の平和に對する此二大亂源を杜絶するを得
べき乎。

甲 第一亂源杜絶法

北の方、盛京省を得れば、以て北京の死命を制するに足れり。

臺灣の必要は山東若くは江蘇の必要 (〇一一)

我が政教の摸範地

南の方、臺灣を得れば、以て南部と東海とを控制するに足れり。他年清廷都を陝西河湖の間に移して、蠟斧を揮は、盛京臺灣は以て其死命を制するに足らず、是に於て乎山東若くは江蘇を得て、豫め事變に備ふるの必要を見る。

地を中央海岸に得るは、啻た遷都事變に備へんか爲めのみ必要なるに非ず。清國を扶掖誘導し、以て文明の化育を受けしめ、以て四億の生靈を塗炭の中に拯はんか爲めにも亦必要なるなり。清人をして文明の恩澤に浴せしめんと欲せば、遙に之を扶掖誘導するを以て足れりとせず。必ずや地を十八省中に得て、我が善政良俗の實例を示し、他の支那官民をして之を目撃せしむるを要す。而して領域狭き時は、恩澤獨り廣きを得ず、感化獨り普ねきをを得ず。且つ盛京臺灣の如き關外の邊境に於て、我が教化を布く

も、未だ以て内地上游の官民を感悟せしむるに足らず。是れ亦地を中央海岸に得るの止む可らざる所以にして、又其地域必ず廣からざる可らず、居民必ず多からざる可らざる所以なり。

廣大繁華の地を中央海岸に得て、我が善政良俗の摸範を示さば、必ず以て支那全部の覺睡改進を促すを得へし。是れ宇内列國の利益にして、亦人生の一大快事に非ずや。

乙 第二亂源杜絶法

支那は決して自ら革新するを得ず。而して其兵事外交依然今日の如くんば、内亂外寇は其素より免るゝ能はざる所なり。苟も之を杜絶せずんば、歐洲列國は勢ひ東侵せざるを得ず。列國東侵すれば、東洋の大亂起る。第一章 是れ兵事外交及ひ之に伴ふの財政權を我に收むるの止む可らざる所以なり。

兵事外交及ひ之に伴ふの財
政權を收
領するの
必要

彼れ此三權を委托すれば、久しうらすして我れ必ず其面目を一
新し、以て内亂外冠を豫防し、以て歐洲列國の東侵を杜絶するを
得へし。

第四節 斷案

甲。乙。兩。種。の。法。策。を。併。行。し、第一。第二。の。亂。源。を。杜。絶。す。る。に。非。す。ん
は、東。洋。の。平。和。は、一。た。ひ。之。を。克。復。す。る。も、二。十。年。を。出。て。す。し。て。必
ず。破。れ。ん。乃。ち。出。師。の。大。目。的。た。る。平。和。を。永。遠。に。克。復。す。る。所。以。に
非。ず。

寔に出師の目的を貫徹せんと欲せば、素より右二様の亂源を杜
絶せざる可らず。之を杜絶するに足らざるの媾和は、目的以下の
媾和にして、余か所謂る姑息の媾和なる者なり。

然れども清廷をして右二様の亂源を杜絶するに足るべき盟約を

右の二大亂源を杜絶するに足らざるの媾和は、皆な姑息の媾和なり

爲さしむると太難し。況や此他尙ほ軍費賠償の必ず要求せざる可らざるあるをや。是れ余が寧ろ併領説を主張する所以なり。

第四章 参看

第六章 併領の難易

一場の放言壯語として、支那併領説を唱ふる者は、世其人に乏し
からず。誠心實意以て之を唱ふる者に至ては、寂として聞く所な
し。蓋し深く思はざるか爲めなるのみ。

地域民衆兩つなから我に十倍するの邦國を併領するは、素より
容易の業に非ず。然れども、之を視て、到底行ふ能はざるの難事と
爲すは、誤れり。併領若し世人の想像するか如き難事たらば、秦は
六國を滅する能はず、劉邦は漢基を開く能はず、趙匡胤は宋朝を

併領は世人の想像するか如き難事に非ず

建る能はず、胡元は宋を滅する能はず、愛親覺羅氏は取て朱明に代る能はざるなり。前人既に之を爲す、後人獨り爲す能はざるの理なし。然るに人の偶々之を説く者あれば、初より不能行の難事と速了して、一笑に附し去らんとす。甚矣哉元氣の衰へたるや。秀吉隆盛の輩をして、之を聞かじめば、夫れ之を何とか云はん。思ふに一商社の力に由て印度を經畧したるの英人は、此の如く小膽ならざるなり。獨力以て亞細亞北部を收領せるの露人は、決して此の如く小膽ならざるなり。

他人皆な爲す所の業も、我れ獨り之を爲す能はずと云は、我れ素より大に他に劣下する所なかる可らず。我れ到底他人他國に企及す可らざるの大缺點、果して安にか在る。

天與の好機に乗するも、尙ほ併領以て四億の生靈を塗炭の中に

冷笑者の
誤謬

極ふ能はずと云ふ者は、先づ我が大缺點の所在を證明せざる可らず。世間恐くは之を證明し得る者なかる可し。果して然らば、彼の併領を冷笑する者は、智なるか爲めに冷笑するに非ずして、寧ろ愚なるか爲めに冷笑するなり。此冷笑は有識より湧くの冷笑に非ずして、寧ろ無識に湧くの冷笑なり。

第二章に列記せる事實と推論とは、支那併領の大難事に非るとを證明するに足れり。凡そ忠愛心、戰鬥力、道義心、團結力等は、皆な保國の一大要素なるに支那人は一も之を備具せず。皇師將に都城に迫らんとするも、恬然顧慮する所なく、甚しきは則ち箠食壺漿して皇師を迎へ、順民を以て自ら呼ぶもの少なからず。是れ豈に領併し難きの民族ならんや。

第一節 支那及び支那人の特質

海陸軍隊
の支離滅
裂

其民、國家思想に富めは、~~た~~トへ忠義の念なきも、之を併畧すると容易ならずと雖、支離滅裂せる支那帝國は、徒らに帝國の名有て其實なく、人民未だ國家の何物たるを知らず。
海陸軍隊の如きは、特に支離滅裂を極め、利害隔絶して脈絡貫通せず。故に直隸の兵破るゝも、兩湖の兵は恬然たり。北洋水師大敗すれば、南洋水師は啗に坐視して救はざるのみならず、却て竊かに嘲笑するに至る。福建艦隊は曾て佛將クールベールの爲めに撃破せられたりと雖、北洋水師は袖手して傍看したり。今日張之洞劉銘傳の輩か、言を左右に托して國難に赴かざるは、毫も怪むに足らず。

開戦以來今日に至るの経過に據て評すれば「我は支那と戦へるに非ず、直隸省と戦へるなり」と云ふも不可なし。爾後戦線大に擴張せば、始めて支那(寧ろ東海岸の數省)と戦ふを得べし。

本邦三四
十年前の
事例

世間或は支那の支離滅裂を怪む者あらん。之を怪む者は、請ふ首を回して我か國三四十年前の形勢を觀察せよ。英將鹿兒島を砲撃するも、長人之を救はず、連合艦隊下の關を攻むるも、薩人之を援けざりしに非ずや。忠愛心に富むと、帝國人民の如きを以てするも、封建割據の日に在ては(僅う三十年前までは)頗る今日の支那に類似する所ありたり。

今日支那
政制の弊
害は却て
封建割據
の日より
も甚だし
も甚だし

今や支那は封建割據の國に非すと雖も、其弊更に是より甚たしき者あり。封建君主は其土地人民を私有し、庶民の盛衰貧富は、直ちに領有者の利害得失と爲る。故に其權力強大なると同時に、其責任も亦重大なりと雖、支那の總督巡撫は則ち然らず。其職權廣大なりと雖、尙ほ土地人民を私有するに非ず。故に子愛の念乏し

くして、收斂苛虐の心動き易し。各省幾と半獨立の姿を爲し、尾大不掉の勢に陥れるは、我封建時代に異ならずと雖も、壯武高潔の士氣に至ては、毫も之れあるを見ず。而して陸上の兵權は、之を總督に分屬し、海軍は之を北洋南洋福建廣東の四水師に分割し、各々號令の出所を異にす。各省各水師皆な半獨立の實を備へ、其相ひ視ると陰然一敵國の如くなるは、理の當さに然るべき所とす。國家保持の一大要具にして、最も統一を必要とする所の海陸軍すら、尙ほ此の如し。江山萬里互に隔絶して、其利害休戚感情習俗大に相ひ異なる四億の生民は、勢ひ四分五裂せざるを得ず。脈絡貫通して、居民皆を一結すれば、國小と雖、之を征服すると太た難し。瑞西共和國の如き、則ち是れなり。之に反し、四分五裂して、陸海軍すら統制を缺く者は、國大と雖、

之を征服すると太た易し。印度の如き、則ち是れなり。

制服の難
易は統制
の張弛に
由て判る

大國は却
て征服し
易し

世間若し「支那は大なるか故に、征服し難し」と想ふ者あらば、是れ誤れるの甚しき者なり。征服の難易は、統制の張弛に由て判る。而して境域過大なる者は、統制を缺き易し。此點より論すれば、支那は大なるか故に、寧ろ征服し易きなり。境域過大にして統制を缺き、其兵民四分五裂すれば、東部の兵を驅て、西部を征するを得へく、北部の民を率て、南部を服するを得べし。支那今日の情勢實に然るなり。

第二節 古來の征服者

漢高何人ぞ、巷閭の一布衣、壯に及んで尙ほ泗上の亭長たるに過ぎず。秦制は十里一亭、亭置一長、主督盜賊、亭長は我が駐在巡查の如き者乎。其軍器金穀兵馬を有せざりと辨を待たず。然るも尙ほ能く秦の社稷を覆へして、炎漢二百年

兵馬軍器
糧食謀士
民衆の供
給を敵に
仰ぐ

他國より
來れる侵
略者も亦
兵馬金穀
の供給を
支那人に
仰ぐ

の基を開けり。爾後代て帝と稱せる者極めて多しと雖も、逆臣に非ずんば、則ち草澤の卑人、兵馬精銳なるに非ず、金穀富足せるに非ず、然るも尙ほ能く四方を席卷して、偉業を後世に遺せり。此輩は帝に糧に敵に據るのみに非ず、兵馬軍器謀士民衆、一として敵に據らざるはなし。何となれば彼等の一身以外は、皆な他人の物なればなり。

讀者若し「支那人にして始めて之を爲すを得べし。他國人は決して之を爲す能はず」と想はゞ、眼を轉して、他國より來れる侵略者を見よ。司馬氏亡びてより以來、長城以外の蠻族にして、支那内地を經畧せる者太た多しと雖、多くは皆な軍資糧食を有せず、支那人の供給に據て支那を經畧したるに非ずや。

特に愛親覺羅氏の領域は、曠古無双の廣大を致せりと雖も、畢竟被征服者たる支那人の力に據て之を征服したるに外ならず。清の太祖努爾哈赤始めて復仇の師を起すに方ては、兵百人、甲三十副。を有せるに過ぎず。其戰勝後明と和するに方ては、毎歲銀八百兩、蟒緞十五疋を受くるの約を得て喜べり。其微々として振はさりしと以て推想すへきなり。然るも尙ほ能く帝業を爲し、後ち遂に支那本部を征服し、北は沙漠を越へ、南は滄海に達するに至れり。

歴代の經畧者に内起外來の別ありと雖、一も四百餘州を席卷するに足るへき兵馬軍器金穀を有せる者なきの一段に至ては、粗ほ相ひ似たり。見るへし、支那は古來領畧者に向て、自己を領畧するに足る可き兵馬軍器金穀等を供給するの邦國なることを。

支那は領畧者を援けて、領畧費を拂ふに慣れたり。切言すれば自

支那古來
の特質

費を以て自己を領畧せらるゝの習癖あり。我か兵馬の精銳、金穀の富足を以てするも、尙ほ此の如き邦國（則ち兵馬金穀なくして征服するを得へき邦國）を併領する能はざるの理、果して安くに在るや。

居民毫も獨立保國の要素を備具せざるも、古來曾て他國他人種の統御を受けたるとなき邦國は、他より之を併領すると稍や難し。然るに支那人は古來數々夷狄禽獸視せる者の統御を甘受し、其朝廷を視ると逆旅の如し。故に何人來て之を併領するも、唯た安んじて其業務に龍くとを得は、則ち之に滿悦す。愛親覺羅氏の爲めに、強て其衣冠を變革せられ、醜を以て美に代へらるゝも、尙ほ恬然として之に安んずる如きは、其明證に非すや。

支那人は外國の支配を受けたり慣れたるに

支那民族は最も征服し易く最も駕御し易し

を爲せる滿酋の無謀刻薄なると辨を待たず。然るも尙ほ支那人は、恬然之に服従して耻るとを知らず、頭に豚尾を戴て揚々誇色あり。天下廣しと雖支那民族ほど征服し易く、駕御し易き者はなかるべし。

嗚呼暴慢無禮の劉邦すら、一劍を提げて四百餘州を併領せり。刻薄無謀の滿州酋長すら、尙ほ曠古無双の偉業を爲せり。蓋し彼等自ら之を爲せるに非ず、支那民種の天質習俗、實に彼等を援けて之を爲さしめたるなり。

第三節 印度征服の事例

印度及び其屬領百八十萬方哩、二億九千萬の民口を擧て、英國女王陛下の統御に歸せしめたる者は誰ぞ。僅かに七萬磅の小資本を以て起れる東印度商會に非すや。

印度併畧の起點は、千六百三十九年其東岸に於て。縱六哩。横一哩の地を得たるに在り。後ち二十七年を経て、西岸のボムベール島を得たりと雖、時の英王は毎歲十磅を獻納せしむるの約を以て、其所有權を東印度商會に讓與せり。其地域價值兩つなから狹少なりしと得て知るべきのみ。

方三哩に足らざる地域は、澎張して百八十萬方哩と爲り、毎歲十磅の收入は遂に五六千萬磅の巨額に昇れり。涓々の水能く洋々の海を爲すとば夫れ是れの謂ひ乎。

英人は如何して此偉業を成就したる乎。世間必ず想像する者あらん。英人は之か爲めに大兵を送り、大金を費したらん」と。是れ妄想なり。

英人は、印度併畧のために、曾て大軍を動かしたるとなく、之れか

英國は印度併畧のために其兵馬金穀を費したるに非ず

兵を敵に借る

征畧は常に敵兵を用ゆ

爲めに錢厘の租税をも徴課し、錢厘の國債をも増加したるとなし。概論すれば英人は印度の方に據て印度を征服したるなり。糧に敵に據れるのみならず、軍隊金穀も亦之を敵地に仰けるなり。軍隊を敵地に仰くの秘計は、佛人の發見に係り、英人は唯た之を踏襲したるに過ぎず。英人は佛人に倣ふて、土兵を訓練し、土兵を以て土人を伐ち、印度の金穀に由て印度を征服し、遂に亞細亞に一大帝國を建設するを得たり。

是れ決して驚く可き事迹に非ず。支那歴代の併畧者も亦多くは此の如く、那翁一世の四方を征服したるも亦此の如し。

英人此に入るに方では、印度は四分五裂して、毫も統一する所なかりき。今の支那と同しく、單に地理上の稱呼に過ぎざりき。故に英人は土兵を練て土人を伐たしむるを得たり。細言すれば英を

國內分裂
せる者は
常に侵入
者を援く

して印度併畧の偉業を爲さしめ、其兵馬金穀を供給したる者は、英國に非ずして印度なり。英國人は之か爲めに一錢の租税を課せるに非ず、一厘の國債を増せるに非ず、一兵一卒を派遣したるに非ず。英兵の印度に在る者少なからずと雖も、是れ皆な印度商會が其私利を保護せんが爲めに募集訓練したる者なり。英政府が英國の爲めに徵募したる者に非ず。侵入者に兵馬金穀を供給して、自國を併畧せしむるは、獨り印度人のみ然るに非ず。國內各地各種族の思想感情利害互に相ひ衝突して、一致團結を缺ける國民は、皆然かせざるはなし。

此の如き邦國を征服するか爲めには、兵馬金穀より智將謀臣に至るまで、一切の軍需悉く之を敵國に借るを得可し。是れ青史の歴々證明する所、斷して寸疑を容れざるなり。

支那は印
度に類似
す

今夫れ地域の大、民口の衆を比すれば、支那却て印度に過き、宗教の交紛錯綜は、彼此相ひ均しく、思想感情利害の衝突、綱紀の頹弛、人心の腐敗も、亦粗ほ相ひ同じ。乃ち國の名有て國たるの實なく、民心睽離して、毫も統一する所なきの一段に至ては、支那寧ろ印度に過くるも、決して及はざる所なし。然るも尙ほ支那併領を難しと云ふ者あらば、豈に僅々七萬磅の小資本を以て起れる東印度商會に耻ちざらんや。

第四節 征服の經費及び兵力

世間或は併領に賛同し、且つ其難事に非ざるを信するも、經費兵力の點に至て、之を危む者あり。是れ余か特に一節を加へて前節の不足を補はんと欲する所以なり

既往二千年間の支那征服者を見るに自ら五万の兵を有せる者な

し。其多數は千人の精兵をも有せざる人物なりき今後と雖も我
か帝國を除ては、支那に向て容易に五萬以上の精兵を出し得る
者なからん。然るに本邦は容易く二十萬の精兵を出すを得べし。
既往將來の併領者に比すれば、我は少なくとも五倍以上の兵力を
有す。

一億五千萬圓の軍事費も、善く之を用ゆれば、用て支那全土を收
領するに足るべしと雖も、假に之を二倍して三億圓を要すとせ
ん乎。尙ほ之を供給するの道なきに非ず。二億を海外に募り、一億
を海内に募らば、我か經濟機關は之か爲め毫も紊亂する所なし。
新たに三億の國債を加ふるも、我か國力に於て優に之を支辨し
得るは、識者を待て之を知らざるなり。

精兵二十萬軍資三億圓を以てするも、尙ほ胡兒賤夫の曾て爲せ

る所を爲す能はざるの理ある乎。之を爲すの利害得失は、事自ら
別題に屬するか故、余は特に一章を設て之を論辨すべし。今ま讀
者の判定を請はんと欲するは、此經費兵力を以て併領の實を舉
る能はざるや否やに在り。

苟も支那の歴史を知る者は、此經費兵力は未だ以て併領の實を
舉るに足らすと云ふ能はざるべし。蓋し古來の併領者は、大抵皆
な十分の一の經費兵力をも有せされはなり。否な百分の一の經
費兵力すら有せざりし者少なからされはなり。

况や征服は素と有利の業にして、自ら其經費を支辨すべき者な
るをや。之を古今東西の歴史に徴するに、征服者にして其經費を
本國より支出せる者少なく、大抵皆な被征服者に課するを常と
す。是れ「征服は自ら其經費を支辨す」と云へる格言の因て起れる

征服は自ら其兵力を供給す

所以なり (Conquest pays its own expenses)
支那歴代の事實は、人をして更に一步を進めて格言を改正するの必要を感じしむ。曰く「征服は常に自ら其經費を支辨するのみならず、亦自ら其兵力を供給す」印度併畧の事迹も亦之を証明す。印度に於ける英兵は皆な印度の金穀を以て訓養せらるゝのみならず、其員數の如きも。之を英人の使役に服する印度兵に比すれば甚た少なし。特に併領の偉業を成就せる印度商會の如きは、其最盛時代と雖も、尙ほ九千の英兵を有せるに過ぎず。

英兵 土兵

一七七三年(イ)	九、〇〇〇	四五、〇〇〇
一八〇八年	二五、〇〇〇	一三〇、〇〇〇
一八五七年(ロ)	四五、〇〇〇	二三五、〇〇〇

一八九三年 七三、九八一 一四五、六三六

(イ)千七百七十三年は、印度政務整理法を制定し、大に印度商會の權力を減殺したる年なり。當時商會付屬の兵員は前記の如し。

(ロ)千八百五十七年は、土兵蜂起して、大亂を生せるの年なり。叛亂鎮定後、英政府は覆轍に鑑みて、大に土兵を減し、英兵を増し、遂に今日の割合と爲せり。然れども尙ほ英兵は全數三分の一を占むるに過ぎず。

印度征服の兵馬金穀は、印度人自ら之を供給せり。今日印度を英國の配下に繫留するの兵馬金穀も亦印度人の供給する所なり。謂ふ可し「英は印度の力に因て印度を征服し、又印度の力に因て之を保有す」と。

是れ印度のみ獨り然るに非ず。支那亦然り。安南亦然り。天下何れの被併領國か然らざる者あらん。世間若し「愛親覺羅氏は、滿州の力に因て支那を併吞し、支那を維持す」と想像する者あらば、誤謬

英は印度に因て其力を因て印度を征服し、又印度の力に因て之を保有す (一三一)

古來兵馬(二三一)
金穀を持
參して他
國を征服
せる者少
なし

那翁の實
例

是より大なるはなし。
善く歴史を讀む者は、兵馬金穀を持參して、他國を征服せる者は少なくて、却て之を敵地に仰ける者多きを知らん。
那翁一世の如きは、東征北伐幾んど寧歲なかりしと雖も、曾て財政上の困難に遭遇したるとなし。其日耳曼列國を蹂躪したる時の如きも、塙を攻むるに當ては、バヴァリアを用ひ、普を攻むるに方ては、塙坡を用ひたり。其經費は之を被征服國に課し、其兵馬も亦之を戰敗者に徵求せり。故に那翁は終身兵馬金穀の不足に苦めるとなかりし。

我が用を爲す者は自國人のみなりと想像する勿れ。敵國人も亦常に我か徵課使役を待つ。而して其勳功却て自國人に優る者少なからず。清のために北京を陥れたるは李自成なり。清のために

明人の功
業却て滿
人より多
し

境土を拓き、明帝を擒にしたるは吳三桂なり。此他清朝のために盡くせる明人極めて多きは、世人皆な熟知する所の如し。今ま愛親覺羅氏の偉業を三分せば、其二は明人の手に成り、滿人の如きは僅かに其一を成せるに過ぎず。

堂々たる日本帝國にして、支那を併領せんと欲せば、其施爲素より逆臣流賊蠻酋等に異ならざるを得ず。故に帝國は彼等か萬事萬物皆な供給を被併領者に仰けるか如くする能はず。從て經費兵力の如きは、我れ自ら之を供給せざる可らず。然れども是れ若干の地歩を支那に占むるに至るまでの事にして、既に之を占むれば、我れ強て之を徵求せざるも、彼れ必ず兵馬金穀爾他百般の必要物を供給すべし。二十萬の精兵と三億の軍費とは、我れ之を準備するも、恐らくは之を用ゆるの餘地なからんとす。好し一た

兵馬金穀
は一時之
を立替へ
置くに過
きす

(三三一)

ひ。之。を。用。ゆ。る。も。遠。か。ら。ず。し。て。必。ず。之。を。回。收。す。る。を。得。べ。し。

第五節 付言

佛國は外
戦のため
に繁榮す

右四節の事實と推論とを取て、第二章の論旨に對照せば、併領は決して世人の想像するか如き難事に非らざることを知るを得ん。那翁は一致結合せる歐洲各國を攻伐するに方ても、尙は兵馬金穀を敵國に徴課し、佛國を疲弊せしめずして、却て之を繁昌せしむるを得たり。況んや四分五裂せる考朽瀕死の清國を征服するに於てをや。其容易なると必ず意料の外に出てん。

如何なる邦國と雖も、其征服費を支辨する能はざる者なし。支那、印度、安南、緬甸、暹羅の如く綱紀頽廢せる邦國は、單に其征服費のみならず、亦其兵馬を供給す。

世間或は露帝が曾て瀕死の病夫を以て目せる土耳其機の、今に至

支那は大
に土耳其
に異なり

るも尙ほ未だ亡ひざるを見て、支那亦當さに此の如くなるべきを唱ふるものあり。是れ支那と土耳其機とは大に相ひ異なることを知らざるに由て起るの謬見なり。

土は尙武
好戦支は
尙文好利

土耳其人は曾て歐亞を蹂躪したる尙武好戦の民なり。彼の尙文好利幾と戦の何者たるを知らざる支那民族と、日を同ふして論ずべき者に非ず。故に士氣敗頽、驕惰風を爲すの今日と雖も、一たひ兵戈の音を聞けば、烟管を投して蹶起するもの全國に充滿す。見よ露の強大を以てするも、未だ容易く志を土に逞ふする能はざるに非ずや。現に千八百七十七年の役の如きは、露兵數々大敗を取れるに非ずや。ナスマン將軍一たひブレヴナを克復すれば、露將之を攻めて五ヶ月に及ぶと雖も、尙ほ之を擊破する能はざりしに非ずや。之を平壤旅順の要害に據るも、尙ほ二日を支ふる

土兵數々
露兵を破

能はさるの清兵に比するは誤れり。此役露國の兵を失ふと八万九千人。財を費すと一億二千万磅。然るも尙ほ未だ土京を陥るゝ能はさりしに非すや。露帝は目するに瀕死の病夫を以てせりと雖も、之を支那に比すれば、尙ほ壯武果敢の健兒たるを失はず。土耳其機の今に至て尙ほ亡びひさるは理勢の當さに然るへき所なり。加之ならず、英國は土耳其機に對して利害上威信上離る可らざるの大關係を有し、鐵鏈固結解かんと欲して解く能はさる者あり。故に千八百五十四年には土を援けて露と開戦し、千八百七十八年には開戦の危険を冒して土を保護せり。英が支那に對して此の如く深大なる關係を有せさるとは、世人の皆な熟知する所なるへし。

英清の關係は大に異なり

果して然らば之を固有の獨立力より觀察するも、將た之を外來

の保。援。力。より觀察するも、支那と土耳其機とは天淵萬里の差あるなり。然るに之を是れ知らず、徒らに土耳其機未だ亡びさるの故を以て、支那も亦當さに此の如くなるへしと想像するは誤れり。

第七章 列國の交渉

四海一家五洲比隣の今日に在ては、國內の私事と雖も、動もすれば他國の容喙を免れず。況や國際の關係をや。

此時に方り、各國皆な別天地を爲し、彼此全く相ひ隔絶せる舊時代の舊思想を懷き、國際の大事を處理するに於て獨斷專行、毫も顧慮する所なきを得べしと想ふは非なり。顧。盼。逡。巡。唯。た。他。國。の。容。喙。干。渉。を。是。れ。怖。れ。て、我。の。當。さ。に。爲。す。へ。き。所。を。爲。さ。ゝ。る。は。益。々。非。なり。腦中常に第三者の關係を念れずして、而も臨機應變、善

外交上の過失

く斷じ、善く行ふ者にして、始て與に外交の能事を言ふべきのみ。然るに今の外交を談する者を見るに、其盲勇なる者は毫も第三者の關係を思料せず、其盲怯なる者は唯た第三者の關係のみを顧慮して、却て獨立國の体面を毀損するを憂へず。其中道に立て、善謀善斷以て能く國威國益を併進せしむる者に至ては、余未だ其人あるを見ず。寔に長嘆大息すべきなり。

泰西諸國中、日清の交戦及び其終局に對して、利害の關係を有すると、最も深大なる者三あり。英佛露是れなり。米曼二國も亦之を有せざるに非すと雖も、其關係唯た通商上に止まり、之を前の三國に比すれば、深淺大小頗る其等位を異にす。故に今回の事變に關し、善く第三者の交渉に處せんと欲する者は、主として右三國の動靜に注意せざる可らず。

英國の舉動特に注目す

此三國は皆な廣大なる領地を亞細亞に有すと雖も、其利害の關係より論すれば、一も英國の右に出る者なし。故に列國の動靜皆な注目せざる可らずと雖も、特に英國の動靜に注目するを要す。帝國は決して第三者の交渉を憂ふるを要せず。然れども此要素を度外に放擲して、全局の大勢を打算する時は、必ず意外の失誤を生せん。蓋し戦争の経過及び終局の形勢如何に由ては、歐洲列國或は多少の調停干涉を試む可ければなり。見よ英國の如きは、既に大に之を試んと欲して、失敗したるに非すや。

思ふに歐洲列國特に英國の如きは、交戦中と雖、干涉を試みんと欲するの意なきに非るへし。然れども之を爲すの利害得失は、列國の當さに深思熟慮すべき所なり。若し今日の形勢に就て論斷するを得ば、將に余は云はんとす「調停は寧ろ交戦中に來るへく、

調停若くは干渉の來るべき時期

干渉は寧ろ終局に際して來るへし」と。余は必ず來るへきを明言するに非ず、又素より來ることを希望するに非ず。唯た若し來らば此の如くなるへしと云ふのみ。

交戦中に干渉を試むるの大責任は、列國の輕々負擔すへき所に非ず。英政府の東方時事に熱心なるを以てするも、交戦中に於ては、恐くは一躍直ちに調停を飛過して、干渉を試むるか如きとなるへし。

第一節 調停の二性質

同じく是れ調停なり。而も公明正大なる者あり、偏私邪慾なる者あり、日本のために起る者あり、支那の爲めに發する者あり。其性質一にして足らずと雖、今ま之を大別して、好意調停惡意調停の二つと爲さん。其性質如何を問はずして、一概に之を喜憂するは、

素より誤れり。其性質に拘泥して、納拒を決するも、亦誤れり。好意解停と雖、納れて以て我か出師の大目的を貫徹するに足らずんは、素より之を謝絶せざる可らず。惡意調停と雖、之を貫徹するに足れば、宜しく之を納諾して可なり。我は唯た我か出師の大目的に照して、其納拒を決せんのみ。

此點よりするも、亦調停を大別して、二と爲すとを得へし曰く。我目的に協ふの調停。曰く之に背くの調停。

既に稱して調停と云ふ、假令惡意に出るも、尙ほ好意の假面を被らざるを得ず。而して納拒の全權は、一に我か掌中に在り。調停に次くに兵力を以てするか如き處爲は、文明國の決して爲すへき所に非ず。若し之を爲して、世道を壞亂する者あらば、帝國は斷然之に反對して、天下の正義を扶持せざる可らず。是れ獨り我か

威信体面の爲めに必要なるに非ず。實に天下の正理公道のため
に必要なるなり。

加之ならず兵力以て之に次ぐの調停は、調停に非ずして干涉な
り、干涉に非ずして命令なり。同等對時の與親國にして、他の與親
國に號令するか如きは、暴虐無道の極にして、之に従ふ者は罪惡
を援けて益々増長せしむる者なり。我か帝國臣民は萬死すと雖
も、決して之を爲さず。

第二節 干涉の二種類

調停の度、一步を進むる者を干涉と爲す。干涉は常に強者を以て
弱者に施し、優者を以て劣者に施す者なり。故に余は干涉の文字
を口にするとを耻つと雖、如何せん世人多くは之を用ゆることを
皆之を用ゆるのみならず、之を用ひて中心竊かに畏怖する者

干涉の惡
以へき所

亦少なからざるを。

干涉に二あり、其意旨より云へは、好意惡意の二つと爲り、其形象
より云へは口舌兵備の二つと爲り、其廣狹より云へは單獨聯合
の二つと爲る。

口舌干涉は、行ひ易しと雖、失敗の憂多し。英のラッセル卿か數々
試みて、數々失敗したるは、其適例なり。

兵備干涉は、失敗の憂較や少なしと雖も、之を行ふと甚た難し。先
づ開戦の決心を定めされは、決して行ふべき者に非ず。露のゴル
チアコッフ公か土耳其機と其屬領との間に施したるか如きもの、則
ち是れなり。

露の兵備干涉は、幾と目的を達するに垂んとして、却て英の兵備
干涉に遇ひ、一變して伯林會議と爲り、再變して露の退讓と爲れ

り。露は之か爲めに兵を失ふと八萬九千人、財を費すと一億二千萬磅、而も大に得る所なくして退讓するの止む可らざるに至れり。蓋し一の兵備干渉は他の兵備干渉を招けるか爲めなり千八百七十七年乃至七十八年の露土戦争史を参看す可し

歐洲今日の文明は、未だ列國をして干渉の惡事たることを知らしむるに足らず。否な之を知るも、之を斷念せしむるに足らず。故に干渉に因て利するの目的さへ確立せば、歐洲列國は口舌兵備兩つなから之を用ゆることを辭する者に非ず。然れども、此成算を得ると極て難し。

列國若し相ひ結托するを得ば、交戦中と雖も、尙ほ口舌干渉を試み、之を援るに連合艦隊の虚勢を以てするとなきを保す可らず。先きに英相の發議(共同仲裁説)をして、廣く列國の賛成を得せし

めは、必ず此奇觀を現出せしならん。

列國深く結托するを得ば、啻に連合艦隊の虚勢を以て、口舌干渉を援るのみならず、一轉して兵備干渉を試み、我れ之を聽かざるに於ては、或は鐵血の間相ひ見るに至らんも、亦未だ量る可らず。此結果に到着せんと欲せば、先づ歐洲諸強國を聯結せざる可らず。此聯結成らざるは、到底干渉の功を収むる能はず。干渉して其功を収むる能はざるは、自ら其威信を失墜する所以なり。

然り而して歐洲諸強國の聯結は、言ひ易くして行ひ難し。英露の相ひ敵視する、普佛の相ひ憤怨するか如きは、之を聯結抱合せしむるの難きと、氷炭相ひ容れしめ、犬猿相ひ親ましむるよりも難し。果して然らば、聯合干渉は到底之を行ふ能はず。好し我れ外交政策を誤るか爲めに、元來聯結す可らざる者を聯結せしむると

歐洲列國の聯合成らざれば兵備干渉を試むる者なかるへし

聯合は決(六四一)
して永續
する能は
す

あるも、ソハ權花一朝の聯結に過ぎず、少しく時日を經過すれば、忽ち内より壞裂す可し。何となれば列國は、歐洲に於て既に大に其利害を異にし、東洋に於て亦大に其利害を異にすればなり。余は茲に斷言す「聯合干涉は決して來らず。萬一誤て來るも、憂ふるに足らず」と。

次に單獨干涉は如何。抑も孤立して兵備干涉を行ふは、列國の猜疑と反撥とを招く所以なり。且其失敗の事迹は、露國會て之を天下に證明して、列國の深の鑑戒する所と爲れり(千八百七十七年乃至七十八年)故に我か外交政策にして、苟も積極的大錯誤に陥らざる以上は、如何なる邦國と雖も、決して單獨干涉を試むる者なかるへし。偶ま誤て之を試むる者あるも、口舌干涉に過ぎず。口舌干涉は、調停と其形を異にして、其實を同ふす。之を謝絶するに於て何かあらん。

獨力以て
兵備干涉
を行ふ者
なかるべ
し

列國多しと雖も、孤立して兵備干涉を施すの無謀者なきは、鏡に照らして睹るよりも明けし。若し誤て之を爲す者あらば、我は唯た斷然之を拒斥して、天下の正理公道に訴へんのみ。十九世紀の文明尙ほ淺しと雖、豈に正義を照らすの光輝なからんや。兵備干涉は、指命なり、號令なり。堂々たる大帝國を以て他の命令に伏従するか如きとあらば、天下後世夫れ之を何とか云はん。帝國臣民は萬死すと雖も、決して之に伏すへきに非ず。其單獨たり、聯合たるか如きは、宜しく問ふへきに非ざるなり。

帝國の決
心

第三節 列國の形勢及び帝國の決心

讀者須らく義憤を抑へ、虚心坦懷以て宇内の形勢を大觀すへし。文明の光輝は、明滅常ならずと雖も、尙ほ全く天下を照らすところ

歐洲亦正
義の士な
きに非す

に非す歐洲列國の外交政策は、私利私慾のために指導せらるゝと多しと雖も、正義公道は未だ全く滅没したるに非す。誠心實意神明に誓て、干涉に反対し、偏私を攻撃するの政治家は、何れの世として之れなきはあらず。比較的論ずれば、歐洲却て其人に富まんも亦未だ知る可らず。見よグラハム氏、グラッドストーン氏は、平生の私交を棄て、バーマーストン卿の支那政策に反対し、其干涉主義を非難するか爲めには、痛撃激攻至らざる所なかりしに非らずや。見よチェール氏は主義上普佛戦争に反対し、之か爲め幾んど一身を犠牲に供したるに非らずや。見よブライト氏は埃及に對する干涉政策に反対して、内閣を退けるに非らや。此類の事蹟を數ふれば、僕を代ふるも枚擧に違あらず、而して皆な正義公道のために一身一家を度外視せるの證左に非ざるはなし。

正理は最後の勝を制すと雖も、一時の政策は感情と利慾との支配を受くると多し。是れ正義家の動もすれば驥足を歐米政治世界に伸はす能はざる所以なり。然れども單に此一端のみを見て、歐米列國の外交政策を速了する者あらば、蓋し誤れるの甚たしき者なり。列國政治社會の腐敗せると論者恣想する所の如くならば、コブデン、ブライト、グラハムの徒は、決して羽翼を英の政治社會に伸はす能はざりしなり。正義の勢力は厭世家攘夷家の恣想するか如く微弱なるものに非らず。文明の光輝は赫灼たらずと雖も、未だ全く滅没したるに非らず。歐米列國の政治社會を支配するは「唯だ一時の感情と自家の利慾あるのみ」と想ふは非なり。

加之ならず、歐米人は國家の威信を重んず。故に無法の干涉を試

英佛露は
干渉の口
實に窮す

みて失敗するか如きは、其最も憂慮する所たり。彼等は亦軍隊の面目を重んず。故に確たる成算あるに非ずんば、容易に干渉以て他の軍功を中絶せしむるか如きとを爲さず。

然り而して平生文明の恩澤を口にする所の英佛は、支那の爲めに干渉して、其蠻行を助成するを得ず。土耳其の腐敗を憤て、數々義兵(所謂る)を起せるの露國は、我に反抗して朽敗垂死の清國を援るを得ず。諸國若し之を爲せば、勢ひ其威信を失墜し、内外の輕侮を受けざるを得ず。

果して然らば、北米聯邦は云ふに及はず、歐洲列國と雖も、交戦中に干渉を試むるか如きとなかるべく、終局の際と雖も、我にして苟も横暴無法の施爲に出でざる以上は、決して口舌兵備二様の干渉を試むるか如きとなかるべし。若し誤て之を試むる者あら

は、必ず大失敗を免れず。而して我れ決して横暴無法の施爲に出づるか如きとなきは、辨せずして可なり。

調停干渉は、其好意たり、惡意たり、口舌たり、兵備たり、單獨たり、聯合たるを問はず、皆な之を謝絶せざる可らず。我に此決心あらば、彼れ恐らくは之を試みずして止まん。

今日の要は、唯た巍然卓立以て斷して他の調停干渉を容れざるの大決心を表明するに在るのみ。之を表明すると同時に、驕慢無道の俗情に墮落せざるに在るのみ。

千八百七十八年の露土戦争に際し、英か之に干渉してサン、ステファノ條約を破毀せしめたるの事例は、世人の動もすれば引て以て干渉の憂患を證明せんと欲する所の材料たり。然れども余を以て之を見れば、彼此大に其形勢を異にし、彼を推して此に及

帝國の決
心豫め定
れば干渉
は來らさ
ず

ほすは、比擬失當の過を免れず。

英露は久しく不倶戴天の怨を結へりと雖も、日英は毫も此の如き憤怒あるに非ず(一異)英土の關係は、極親極密、離れんと欲して離る可らざるものありと雖も、英清は素より此の如き關係あるに非らず(二異)特に出師の目的に至ては日露全く其趨向を異にす。故に露に對しては英能く干涉の名義を得たりと雖も、我に對しては、之を得る能はず(三異)是れ英は露に向ては曾て兵備干涉を施したるも、我に向ては決して之を施すへきの理由なき所以なり。

又土耳其は、士氣敗頽したりと雖も、尙ほ一箇の尙武國たるを失はず(一異)故に露の強大を以てするも、容易に之を破る能はず、却て數々大敗の汚辱を被れり、(二異)英若し大軍を出して之を援るに至らば、露は此連合軍に抵敵する能はざると明けし(三異)是れ露か涙を吞んで英の干涉に屈從したる所以なり。

彼是の形勢相ひ異なるべし。然るに英國曾て露土戰争に干涉したるか故に、今日も亦干涉すへしと想推し、露國曾て之に屈從したるか故に、我も亦屈從せざる可からすと速了するか如きは、迷誤の最も甚たしき者なり。

好し他國は幾たひ干涉に屈從するも、我は一たひも之に屈從すへからず。正義の爲めに戰ふものは、眼中唯に正邪有て、成敗なきを要す。吾人若し正を執て雄飛する能はずんば、唯た正を踏て斃るゝあらんのみ。他の惡例を引て、我か模範と爲すか如きは帝國臣民の斷して排斥すへき所なり。

幾堂曰く曩きに英露相結んで強力仲裁を我れに試むるの策將さに成らんとする

や、米國則ち獨力仲裁の勞を取らんとして其意を我に致せり、而して英露の協同仲裁策將々に成らんとして破ふるや、米國亦自ら其提議を撤回す、此の如きは著者の所謂る厚意仲裁なるもの乎、此事世人多くは知らず、姑らく附記して參考に供す、

又曰く清に對する英露の利害相容れざる、方圓管ならずと雖ども、其の清國の遂に我手裡に歸するを憂ふるに至りては則ち一なり、我れ清國を併領するの日は、露の圖南策永く畫餅に屬するの時にして、印度亦漸く英國の爲めに心腹の禍を爲さんとす、我軍北京を陥れ、四百餘州亂麻の如く亂るゝの日に至らば、彼れ居留民保護を名として、協同的強力干渉を試むるの虞なしとせず、蓋し英露本と其利害を異にすと雖ども、我國の富強は彼等の均しく憚かる所るなればなり、縱横策を講して其聯合を未然に防ぎ、列國をして袖手傍觀の地位に立たざるを得ざらしむは、只外交官の伎倆如何にあり、

第八章 併領の利害

支那併領の利害得失は、一言以て之を斷するを得へし、曰く利有て害なしと。元は支那を併領したるか爲め、何等の損害を受けたる乎。清は支那を併領したるか爲め、何等の損失を被りたる乎。余は自ら此の如き自明の問題を細論せざるを得ざるの境遇に陥れるを悲む。

我が智識
世界の停
滯不動

我が智識世界の停滯不動なるや、領域擴大問題に關しては、今ま尙ほ米人の虚論と、三四十年前英國に行はれたるマンチエスター學派の謬見とに支配せられ、甚しきは則ち領域擴大を視て、國家の害事と爲す者あり。此輩の懶惰無稽なるや、毫も歴史上の事實と、學理の改進とに注目せず。世界の輿論實行は、既に全く一變したりと雖、之を知らずして、尙ほ守株膠柱の陋見に執着す。是れ併領利害論の二由て起る所以にして、又余か自明の眞理を細論

海陸の縮
小、世界
の大變、

するの止む可らざる所以なり。

第一節 領域の縮小

蒸電二氣力の利用法開けてより、世界の海陸は大に縮少せり、五
大洲は俄然一變して五小洲と爲れり。先きには數十若くは數百
日を費せる海陸の行程も、今は數日にして往復するを得へく、其
音信の如きは、數分時にして之を通するを得へし。先きには神經
脉管未だ備はらざるか爲め、支離滅裂せる全世界も、今は鐵道電
線、汽車、汽船の類之か神經脉管血液と爲て、一箇の活動体を完成
す。

昔日の大
國は今日
の小國

脉絡全く缺乏せる舊世界に在ては、領域の過大に苦める邦國も、
今は毫も之に苦まざるのみならず、却て其狭小を憂ふるに至れ
り。往時の大國は、今日の小國を爲れり。今日の大國も亦將に他日
の。小。國。と。爲。ら。ん。と。す。況。し。て。や。今。日。の。小。國。は。益。縮。益。小。遂。に。其。地
を。宇。内。列。國。中。に。保。つ。能。は。さ。る。に。至。ら。ん。も。圖。り。難。し。今。日。と。雖。希
臘、瑞典、白耳義、荷蘭陀の如きは、他の大國のために壓倒せられ
て、其頭角を顯はす能はざるに非すや。

爾後運輸交通の便益々開けて、地域愈々縮小の實を現さば、右等
の小國は他の侵畧を被らざるも、尙ほ自ら獨立の体面を維持し、
對等の交際を爲す能はざるに至るへし。

往時交通機關未だ備はらず、脉絡未だ貫通せざるの際に在ては、
地域如何に狭小なるも、以て他の大國と頡頑するを得たり。音に
然るのみならず、小國は統制し易く、大國は統制し難かりしか爲
め、小國却て大國を制するを得たるの事例も亦少なからず。此の
點より論すれば、地域の狭小なるは、音に國家の弱所たらざるの

小國は漸
次滅亡す
へし

古は小國(八五一)
能く大國
に頼頭し
たるも今
や則ち然
らず

形勢一變
後兵員大
に増加す

兵器大に
進歩し兵
費大に増
加す

みならず、却て其強所たりしなり。

然るに交通機關大に備具してより以來、形勢全く一變し、如何なる大國と雖も、容易に之を銃制するを得るに至れり。號令一たひ中央政府より發すれば、數日を出てすして全國に普及するに至れり。多年政治家の深憂を爲せる尾大不掉の形勢は、全く消滅して、其痕迹を留めざるに至れり。世界の文明國に就て云ふ支那は例外たり是に於て乎大國は唯た大の利のみを受けて、毫も其弊を受けざるに至れり。交通機關の整備は、大國を利すると多くして、小國を益すると少なし。是れ國の強弱は、其地域の廣狹、民口の衆寡に由て判るゝに至れる所以の一なり。

往時交通機關未だ整備せざるの日に在ては、大兵を養ふも容易に之を戰場に送遣する能はず。故に列國皆な大兵を養はざりし

と雖も、今や列國競ふて其兵員を増加し、遂に或は五六十萬(佛曼)或は幾と百萬(露國)の常備兵を養ふものあるに至れり。此の如きは小國の到底企及し得へき所に非ず。是れ國の強弱は、其地域の廣狹、民口の衆寡に由て判るゝに至れる所以の二なり。

且つ兵器の進歩は、大に戦備の經費を増加し、白耳義、荷蘭陀の富を以てするも、尙ほ英、佛、曼、露と同額の兵器を具備する能はざるに至れり。其國力を傾倒するも、尙ほ大國の爲す所に倣ふ能はざるに至れり。是れ國の強弱は、地域の廣狹、民口の衆寡に由て判るゝに至れる所以の三なり。

往時は、小國と雖も、音に大國と頼頭するを得たるのみならず、動もすれば別ち之を凌駕するを得たり。交通械關備具してより、形勢全く一變し、小は以て大に敵す可らず、寡は以て衆に敵す可ら

地域縮小(〇六一)
して強弱
の勢顛倒
す

歐洲政治
家の先見

さるに至れり。而して此形勢は今後愈々増加すへき傾向あり。地域の縮小、強弱の變化、實に此の如きものあるを知らずして、依然舊世界の舊思想を株守し「領域狹小なるも以て憂ふるに足らず」と爲す者あらば、是れ世界の「大勢を知らざる者なり。天下の弱國を以て自ら満足せんと欲せば、則ち可なり。將來永く大國の凌駕を甘受せんと欲せば、別ち可なり。苟も之を欲せずんば、今に及んで其領域を擴大し、以て自ら宇内大國の列に入らざる可らず。

歐洲列國の政治家は、夙に此形勢を看破せり。故に比年頻りに領域擴大に盡瘁し、近時僅かに名を強國中に列するを得たるの伊太利すら、尙ほ壤地を紅海沿岸に拓くに至れり。

小國衰滅の憂を懷くものは、獨り政治家のみに止らず、閑居靜思の學者と雖も、尙ほ之を憂へて、爾餘の小國は、異日或は米露二大國のために、壓倒せらるへきを説く者あり。

余は必ずしも此輩の憂懼に賛同する者に非すと雖も、蒸電二氣力を運輸交通に利用せるより以來、五洲の海陸俄かに縮少し、大小強弱の關係、全く其由る所を異にするに至れるは、争ふ可からざるの事實なり。眼に此事實を見るも、尙ほ恬然として舊態に安んずるか如きは、守株膠柱の徒に非んば之を爲す能はず。

天下の形勢は、潜運黙移して、日夜其歩を停めず。苟も經世の志を抱くものは、豫め將來の變化を洞察して、之に處するの計を講せざる可らず。彼の地域縮小の一大事實すら知らず、假令之を知るも、擴大以て之を填補せんとを知らず、漫に迂儒の陋説に制御せられて、領域擴大に反對する者の如きは、與に經世の要務を談す

大小強弱
全く其由
て判る、
所を異に
するに至
れり

るに足らず。
 往時に在ては、小國未だ必ずしも弱國に非ざりしと雖も、今や小國は悉く弱國と爲れり。今後交通機關益々完整して、地域愈々縮小せば、小國は益々弱を加へて遂に衰滅するに至らんとを恐る。是れ歐洲列國の競ふて其領域を擴大し、以て他日の地歩を作る所以なり。
 世間若し併領の利害を疑ふ者あらば、此點に於て三たひ其意を致すを要す。

第二節 屬領政畧の一變

古昔、荷蘭、西班牙、葡萄牙等の諸國が屬領を四方に有せるの日は、言を待たず。今より三四十年前と雖も、尙ほ屬領を奴隸視し、唯た本國の利益の爲にのみ之を保有する者と爲せり。故に歐洲諸國の屬領に對するや、専ら暴威猛力を以てし、唯た本國の利益を是れ謀て、毫も屬領の利害休戚を顧慮せざりしもの滔々皆な是れなり。

此の如き政畧は、理に於て既に不可なるのみならず、實際の利害に於ても亦策の得たるものに非ず。本國の屬領を視ると奴隸の如くならずば、屬領の本國を視ると勢ひ仇敵の如くならざるを得ず。北米植民地の叛旗を翻へせるか如きは、毫も怪むに足らざるなり。

古昔チルゴ一謂へるとあり「植民地は某實の如し。熟すれば則ち枝を辭す」と。當時傳へて名言と爲せり。屬領を奴隸視するの弊風盛んに行はるゝに方ては、名言たりしと雖も、屬領政畧既に全く一變したるの今日に在ては、無實の妄言たるを免れず。蓋し

屬領政畧
 一變して
 宗屬の關
 係其面目
 を改む

近世史上の事實は歴々其反對を證明すればなり。

北米植民地の獨立は、歐洲列國政治家に與ふるに一大鑑戒を以てせり。其遠識あるものは、之か爲めに屬領政畧の大に改良せざる可らざるを看破し、其淺見なるものは、之か爲めに屬領を蛇蝎視するに至れり。爾後幾多の變遷を経て屬領政畧は漸次改進せり。英領カナダの如きは千八百六十七年を以て議院政治を得、他の植民地も亦尋て責任内閣を得、遂に本國人民と同様の良政府を戴くに至れり。特に千八百七十六年印度を揚げて帝國と爲し、女王をして其女帝を兼ねしめたるに至ては、屬領政畧の進化も亦大なりと云ふへし。先に北米植民地を酷待して、其叛亂を激成したるに對觀せば、幾ど同一英國の施爲とは思はれず。スタンホープ卿曰く「百年以前に於て、彼か如き狂暴なる政畧を

施さずんば、北米植民地は決して背叛せざりしならん」と。

グラント將軍も亦曰く「英國若し十八世紀に於て、今日の如き屬領政畧を採用せば、吾人は決して獨立せざりしならん」と。

カナダの如きは、時に分離論を唱ふる者なきに非すと雖も、其數太た少くして、且つ多くは佛蘭西民種なり。畢竟人種的觀念に制せられ、強て異を立つるに外ならず。

カナダ人の大多數は、現狀に満足し、若し英國と分離するの止む可らざるに遭遇せば、則ち去て北米聯邦と合同せんことを希望す。

蓋し小國分立の時代は既に經過したりと思料するか爲めなり。露の屬領政畧は、英に比すれば、初より大に進歩せり。露の新たに經畧せる所は、大抵本國と接續せるか故、之に付するに屬領の名義を以てせず、直ちに本國の版圖中に收加せると、我か帝國の琉

球群島に於けるか如し。

古來の支那侵略者に至ては、更らに一步を進め、音に之を屬領と爲さるのみならず、却て之を本國と爲せり。元清皆な都を支那に遷して、政令を是より出せるか如き、則ち是れなり。

植民地及び征服地に對する政畧は、一にして足らず。其巧拙亦大に相ひ異なりと雖、要するに之を奴隸視するの弊習、一たひ去れば、改進の端則ち發く。今日は弊習既に去て「屬領の民と雖も、亦本國人民と同じく、權利幸福を享受すべき者なり」との思想、廣く世人の腦裏に湧けり。屬領に對する思想既に一變すれば、其政畧も亦從て其面目を一新せざるを得ず。

思想政畧兩つなから既に一新せり。乃ち其結果も亦大に舊時に異ならざるを得ず。是れ舊時は熟すれば則ち枝を辭したる果實

も、今日は熟して益々緊着するに至れる所以なり。

支那を併領して、收斂苛虐の暴政を行はんと欲せば、永く之を保有すると、或は難かるへしと雖も、之に臨むに寛仁信義の正道を以てせば、彼れ必ず悦服するに是れ違あらざらんとす。

古來屬領或は本國の累を爲せるとあるは、屬領の罪に非ず、虐政素と之を激成したるなり。虐政を施せば、本國人民と雖も、尙ほ或は叛亂を企つ。何ぞ獨り屬領を咎めん。

議者或はアルサース、ローレーヌ二州の、今に至るも尙ほ佛國を慕ふを見て、他國を併畧するの非なるを説く。蓋し特例を視て、通則と爲すの過ちなり。此二州は素と佛國の有に非ず。却て日耳曼列國中の者たりしが、前二百年以内に於て、佛國の叛圖に歸し、千八百七十年の役、再び曼軍の爲に克復せられたる者なり。然るに

屬領の罪に非ず、政略の罪なり

佛の二州は特例

其曼を厭ふて佛を慕ふと、赤子の慈母に於けるか如し。是れ天下稀有の特例にして、他に類例あるを視す。然るに議者之を推して、爾他悉皆の征服地に及ぼさんと欲す。無稽も亦甚たしからずや。

第三節 マンチエスター學派の謬見

古昔交通不便にして、方萬里の小國と雖も、尙ほ尾大不掉の弊に苦めるに方ては、領域擴張説に反對せる者、當さに多かるべきの理なり。下て近世に至るも、マンチエスター學派の如きは、力を極めて之に反對し、宇内に散布せる英領植民地をして、漸次獨立せしめんと欲する者あるに至れり。

今ま此説の由て起る所を案するに、原因全く事實を誤認したるに在り。彼等は本國政府の惡政を施すを咎めず、却て屬領の之を憤怒するを責めたり。特に米國獨立の一事は、最も彼等の腦漿を

刺激したり。其意蓋し謂ふ「獨行に堪ゆるに至れば、直ちに恩義を怱れて、分離するか如き屬領は、寧ろ初めより之れを有せざるの優れるに如かず」と。焉う知ちん屬領の叛くと叛かざるとは、政畧の當否に在て存するを。

彼等は「屬領は皆な本國の累を爲すものなり」と妄想せり。虐政を以て叛心を激成するに非らずんば、屬領は容易に叛旗を翻かへす者に非ざるとを知らざりき。太濠洲植民地か、自ら軍隊を騙制し、且つ經費を醸出して、本國の急に赴かんとせるか如き事態は、彼等の夢想する能はざる所なりき。

特に彼等は、交通機關の整備に由て、地域大に縮小したるの一大事實を度外視せり。故に其説多くは空粗迂遠、幾ど取るに足る者なし。

利害は屬領の有無に在らずして、政畧の得失に在り。政畧其當を得されは、屬領は害物と爲り、政畧其當を得れば、屬領は利物と爲る。是れ理の極めて賭易き所なり。然るに彼等は此理を賭る能はずして、其本末を顛倒し、結果を誤認して原因と爲せり。

マンチェスター學派は、此の如く誤謬の事實に基て、領域擴大説に反對し、甚たしきは則ち屬領放棄説を主張するに至れり。其根據既に誤れば、其演繹亦た從て誤らざるを得ず。唯た夫れ誤れり、故に僅かに三四十年を経て今日に至れば、英國の輿論は既に全く一變し、世間復た一人の屬領放棄説を唱ふるものなし。

然るに我か同胞兄弟中の英書を讀む者、多くはマンチェスター學派の訓化を受け、而して爾後の遷延に通せず。三四十年以前の輿論を知て、今日の輿論を知らず。彼の學者を以て自ら任ずる者と

雖も、動もすれば則ち既に廢滅せる謬論を紹述して、世俗に誇示す。此の如くして群盲相ひ導き、遂に一世の風潮をして非擴大説に向はしむるに至れり。今日の世、尙ほ疑を領域擴大の利害に挟む者あるは、マンチェスター學派の謬論之か遠因を爲し、活吞半解の學者先生之か近因を爲せり。

北米聯邦の如きは、今日と雖も尙ほ領域擴大説を非難するもの少なからず、我か同胞兄弟中には、多少此輩の感化を受けたる者あり。是れ亦領域擴大の利害を疑ふ者あるの一因乎。

北米聯邦は、世界一流の大國にして、此に移すに全歐の民を以てするも、尙ほ狭きを覺えず。而して現在の民口は、僅々六千万に過ぎず。乃ち其憂ふる所は、寧ろ領域過大にして民口不足なるに在り。自ら領域を擴大するの必要を感せざる間は、寧ろ口を正義に

籍て、之に反對するの優れるに如かず。米人中今日と雖も、尙ほ非擴大説を唱ふるものあるも亦宜ならずや。

米人の之を唱ふるは、蓋し爲めにする所あるなり。知らず我か學者先生は何の爲めにする所あつて、其口吻を學ぶ乎。

第四節 擴大論の改進

十九世紀の末年は、領域擴大熱頗る昇騰せるの時際なり。然れども之を前世紀の者と比すれば、其根據全く相ひ異なるを見ん。

十七八世紀に在ては、人皆な奴隸の多寡に由て、其貧富を分てるの心を以て、國も亦争ふて屬領を攫取せり。其目的唯た屬領を擧て、本國の犠牲に供し。之に由て私利私益を經營せんと欲せるに外ならず。此の如き意想は、其根底に於て既に誤れり。故に西葡、荷、佛は、一時大に之を得たりと雖も、皆な久しからずして之を失

昔時屬領
所有者の
不仁不義

へり。蓋し一群の民族を擧て、他の民族の犠牲に供し、私利經營の具と爲すか如きは、不正不義の甚たしき者なればなり。文明の光輝は、奴隸制度を照破したるの餘力を以て、亦幾ど此類の屬領制度を照破せんとしたり。彼のマンチエスター學派の謬論も、尙ほ一時天下を風靡せんとするの勢力を得たるは、蓋し此時會に投せるか爲めなり。

奴隸畜養の心を以て屬領を保有するは不仁不義の甚たしき者なり。不仁不義を以て其民に臨めば、本國と雖も、尙ほ永く之を保有する能はず。況んや屬領をや。西、葡、荷、佛、諸國か、一時大に屬領を得たるも、忽ち之を失へるは、蓋し偶然に非らざるなり。

マンチエスター學派は、天下皆な屬領政畧を誤れるの機會に乘じて、大聲疾呼以て非擴大説を唱へたり。故に響應者忽ち四方に起

り、一時の勢焰幾と當る可らざるに至れり。下て三四十年前以前に至るも、非擴大熱尙ほ盛熾にして、英國植民省の高等官すら尙ほ公然屬領放棄説を唱へたり(テーロル氏ローガー氏の類)。然るに爾後三十年間の講究は、全く英國の輿論を一變し、今日は復た一人の非擴大説を唱ふるものなきに至れり。曾て國務大臣の要職を占めたるフースター氏は、千八百八十五年に於て明言して曰く「歐洲列國は皆な漸く我英國の屬領の如何に重要なかを悟り、已も亦之を得んと欲して、百方盡瘁するに至れり」と。然り、トンキン。新ヘブライツ。新ギニア。東西亞弗利加。マダガスカー。紅海沿岸の如きは、皆な近時に至て、曼佛、伊が、新たに指を染めたる地方なり。

フースター氏は、四海に散布せる屬領を聯結して、一大帝國を組織し、以て其軍事外交を歸一せしめんと欲し、之か爲め特に協會を組織せり。氏に次て該協會に長たる現任總理大臣ロイズベリ卿の如きも、亦之か爲めに一生を委ねんとを誓へる者なり。此時に方て本邦尙ほ數十年前以前英國に行はれたる非擴大説屬領放棄説を生吞活吐する者あるは、余の怪訝に堪へざる所なり。

屬領に對する古今の相違

古は奴隸畜養の心を以て、屬領を増加せり。今は一視同仁の心を以て、之を増加す。古は收斂苛虐の政を施さんか爲めに、屬領を増加せり。今は寛待優遇以て其民心を收攬せんか爲めに、之を増加す。古は唯た貪婪飽くを知らざるか爲めに、屬領を増加せり。今は地域縮小して小邦分立の時代既に經過せるか爲め、止むなく之を増加す。古は別に必要なくして、妄に屬領を増加せり。今は地域の縮小と民口の繁殖とに由て起れる護國の必要上より之を増

加す。其形迹相ひ似たりと雖、其精神は全く相ひ異なれり。

第五節 列國の屬領

今ま歐洲列國の屬領を以て、其本國の地域民口に對照すれば、凡そ左の如し。(イ)

	方哩	人口
英 本國 屬領	一、二〇〇、〇〇〇 八、九七〇、〇〇〇	三、八〇〇、〇〇〇 三、一七〇、〇〇〇
露 本國 屬領	一、九〇〇、〇〇〇 六、八七二、〇〇〇	八、八〇〇、〇〇〇 三、一〇〇、〇〇〇
佛 本國 屬領	二、〇〇四、〇〇〇 二、四八四、〇〇〇	三、八〇〇、〇〇〇 四、四〇〇、〇〇〇
葡 本國 屬領	三、四〇〇、〇〇〇 七、四三〇、〇〇〇	四、七〇〇、〇〇〇 五、四〇〇、〇〇〇
荷 本國 屬領	一、二〇〇、〇〇〇 七、六六〇、〇〇〇	四、六〇〇、〇〇〇 三、三〇〇、〇〇〇
普 本國 屬領	一、三三四、〇〇〇 七、七四〇、〇〇〇	二、九〇〇、〇〇〇 二、〇七〇、〇〇〇

西 本國 屬領	一、九七〇、〇〇〇 四〇五、〇〇〇	一、七五〇、〇〇〇 九、七〇〇、〇〇〇
丁 本國 屬領	一、五〇〇、〇〇〇 八七〇、〇〇〇	二、二〇〇、〇〇〇 一、二七〇、〇〇〇
伊 本國 屬領	一、一〇〇、〇〇〇 五、四六〇、〇〇〇	三〇、五〇〇、〇〇〇 六、二〇〇、〇〇〇

(イ)本國と屬領とを區別すると容易ならず。今日稱して本國と云ふ者と雖も其古に遡れば、侵奪併呑に成れる部分少なからず。列國皆な初めより今日の如き境域を有せるに非ず。然れども世人の通常稱して、本國と云ふの地域は、古昔の歴史如何に關せず、爰に之を本國中に加算し、其併奪の年紀特に近きものは、之を屬領中に加算したり。要するに宗屬の概勢を示すに過ぎず。

(ロ)露國の屬領政畧は、得るに従て之を本國の版圖中に収むるに在り。故に素と宗屬の別あるに非ずと雖、今ま假に歐洲に於ける露國よりポーランド及びフィンランドを扣除せる者を本國と爲し、爾餘悉皆の領域にボクハラ及びキヴァの二付庸國を加へたる者を屬領と爲せり。

(一)日耳曼諸小國は、素より普の屬領に非すと雖も、普が之を聯結して其盟主と爲れるは、僅々二十餘年以前に在り。故に今ま普國勃興澎張の形勢を示さんか爲め、假に之を屬領中に加算せり。アルサース。ローレーヌ二州の如きも亦然り。
(二)英露佛普の諸國は、皆な近年に及んで、大に其屬領を増加したり。特に伊太其の屬領に至ては、皆な最近五六年間に於て併略したる者とす。

右の一表に由て宗屬の地域民口を稽察し、更に一步を進めて列國が屬領を得たるの年月を觀查する者あらば、必ず豁然として「非擴大説は既に過去の迂論に歸せる」を感悟す可し。況や屬領放棄説をや。

屬領熟の騰進は、古來未だ曾て今日の如く盛んなるはあらず。其故何そや。古來交通機關は未だ曾て今日の如く整備したるとあらず、從て領域未だ曾て今日の如く縮小したるとあらず。か爲めなり(一因)又民口未だ曾て今日の如く繁殖したるとあらず

か爲めなり。(二因)

領域縮小すれば、先きには其現狀に満足したる邦國も、新たに疆土を併畧して、之を補填せざるを得ず。民口繁殖すれば、先きには其過剩を患へざりし邦國も、新たに壤地を開拓して、之を移遷せざるを得ず。今日の領域擴大熱は實に人生の必要上より起れり。其原因を貪婪無飽の邪慾に歸して、之を排斥する者は、生存競争の原理に反對する者なり。

單に民口過殖の憂を救はんと欲せば、生民稀疎の境土を得るより善きはなし。單に地域縮小の變に應せんと欲せば、寧ろ民口繁多にして、且つ從順御し易き壤地を取るの優れるに如かず。民口稀疎の地を得て、我か民人を移植すれば、以て民口過殖の憂を救ふを得へしと雖も、許多の歳月を費すに非されは、以て領域

今日の領
域擴大論
は人生の
必要より
起る

本邦の憂
は領域縮
小と民口
過剰とに
在り

縮小の憂を救ふに足らず。民口繁多の地を得て之を綏撫すれば、以て速かに領域縮小の變に應ずるを得へしと雖、以て民口過剰の憂を救ふに足らず。二者各々長短あり、一舉兩全は畢竟望むべくして、得可らざるの業たり。然り而して我か帝國の如きは、領域縮小民口過剰の兩憂を兼備す。故に苟も壤地の併領すへきものあらは機を失はすして直ちに之を併領せざる可らず。民口繁多の地素より可なり。民口稀疎の地も亦可なり。二者を兼ね併はずれば、以て兩憂を救ふを得へし。唯た其一を併領するも、亦以て一憂を攘ふに足れり。無爲にして歲月を経過せば、邦域益々縮小して、遂に天下の最小國、最弱國と爲り了らんとを恐る。

彼の歐洲列國か競ふて壤地を擴大するは、唯た貪婪無飽の邪慾に制せられて、然るには非ざるなり。蓋し亦た生存競争の必要に

迫らるゝか爲めなるのみ。

第六節 財政上の觀察

論して此に至れば、他の諸點に於ては、讀者復た併領の利害を疑はざるへし。世間若し之を疑ふものあらは、其説必ず財政上にあらん。

我れ若し支那を併領せば、我か新屬領は廣漠無人の野を得て、此に本國人民を移植せるもの、則ち所謂植民地なるものと、全く其情形を異にす。故に列國植民地の財政を以て、我か未來の屬領を律するは、比視其當を得たるものに非ず。英領印度の如き者にして、始て之を日領支那の前途を卜するの考資に供するを得へし。

併畧以前の印度と、現在の支那とは、其情形大に相ひ類似すると

は、既に第六章に畧述せり。而して英は別に自國の兵馬金穀を費消せずして、容易く之を併畧したるのみならず、其政權を本國政府に移せるの後と雖も、英は印度あるか爲めに、財政上の損失を受けたると少なし。時に或は印度の租税を以て本國及び印度に於ける悉皆の經費(印度の爲めに用ゆる)を支辨する能はさりしとなきにあらずと雖も、其不足額寡少にして未だ以て財政上の困難を致すに足らざりき。見よ本國の財政と雖も、數々不足を見るところあるに非すや。則ち不足を生ずと雖も、租税の徵課未だ民力の極度に達せざる以上は、毫も國家の憂を爲すに足らざるなり。特に近世に及んては、印度の財政は愈々富足に赴けり。比年銀貨大に下落したるか爲め、支出從て大に増加したりと雖も、尙ほ毎歲多少の收入超過を見る。

加之ならず印度に於ける租税其他雜收入の凡う四分の一は、毎歲之を英京に輸送し、此に之を費消するを常とす。故に收支上多少の不足あるも、英國は尙ほ大に利する所あるなり。況んや年々少なきも數十萬圓多きは則ち數百萬圓の收入超過を見るに於てをや。且つ夫れ屬領財政の收支相ひ償ふは、獨り印度のみ然るに非ず、新開の植民地と雖も亦多くは然り。唯た植民地は以て將來の日領支那を律す可からざるか爲めに、先づ其情形相ひ酷似せる印度の事例を説けるのみ。

今更最近の報告書に據て、左に列國屬領の收支を畧記す。

(一) 英領印度

地域
人口

一、八〇〇、二五八方哩

二八七、二二三、四三一人

收入	五七、五二一、八〇〇磅
支出 ^(イ)	五七、二一〇、一七〇磅
收入超過	
輸入	三〇一、六三〇磅
輸出	五三、七二五、八六〇磅
輸出	七三、二六〇、九〇〇磅
輸出入合計	一二六、九八六、七六〇磅
^(イ) 此の經費の凡そ四分の一は英國に於て費消するものとす。	
(二)英領植民地 ^(イ)	
地域	七、一七四、一七五方哩
人口	一九、五八八、〇四六
收入	五〇、一一六、二〇九磅
支出	五〇、四三八、三一七磅

收入不足

輸入	一五五、九四八、一六七磅
輸出	一五三、六三一、二九〇磅
輸出入合計	三〇九、五七九、四五七磅

(イ)植民地に備ふるの英兵は三一、九六四人にして、本國より支出するの軍費凡そ二、〇〇〇、〇〇〇磅なり。内二四九、五〇〇磅は、諸植民地の寄付する所にして、印度は別に一、六〇四、四九一磅を寄付す。

歐洲に於ける英の屬領は、單に軍事上の目的を以て併略したる者なるか故、其財政上の收支素より相ひ償ふべきの理なし。マルタ。ゴゾ。及びジブラルターの如き則ち是なり。

亞弗利加、亞米利加の二洲に於ける英の屬領は、概して支出尙ほ少しく收入の上に出るを免れず。

之に反して亞細亞と大濠洲とに於ては、收入大に超過するか故、全世界の屬

額を合算すれば、僅々二萬磅の収入不足あるに過ぎず。

(三)佛國の屬(イ)

チユーニス	収入	二二二、二三一、〇〇〇フラン
チユーニス	支出	二二二、一五三、八五〇同
	収入超過	七七、一五〇同
アルゼリア	収入	四八、二九一、一五〇同
アルゼリア	支出	七〇、四六六、七二九同
	収入不足	二二、一七五、五七九同
東蒲塞	収入	三、二七五、〇〇〇同
東蒲塞	支出	三、〇五九、二三六同
	収入超過	二一五、七六四同
安南東京	収入	一七、三三一、〇〇〇同
安南東京	支出	一七、〇三四、六二〇同
	収入超過	二八六、三八〇同

(イ)交趾の収支は各々三〇、三六六、二〇四フランにして、佛政府は別に三、一六〇、三四〇フランを支出し、交趾は東京安南の軍事費として四、七〇〇、〇〇〇フランを支出す。

(四)荷蘭陀領東印度

一八八九年	収入	一三二、三三二、〇〇〇 <small>ギルダー</small>
一八八九年	支出	一二九、一三三、〇〇〇同
	収入超過	三、一九九、〇〇〇同
一八九〇年	収入	一三七、七八九、〇九〇同
一八九〇年	支出	一二七、七三六、〇〇〇同
	収入超過	一〇、〇五三、〇〇〇同
一八九一年	収入	一一六、三四九、三〇四同
一八九一年	支出	一三一、二六二、八九九同
	収入不足	一四、九一三、五九五同